奪われた王妃

花　田　文　男

クレチアン・ド・トロワの『ランスロまたは荷車の騎士』は『ペルスヴァルまたは聖杯の騎士』と共に，かれの作品中ではもっとも後世に影響を及ぼした作品といえる。

にもかかわらずこの作品は，構成上のさまざまな欠陥，前後の矛盾が指摘されている。たとえばなぜ王妃グニエーヴルを的にした決闘がアーサー王の宮廷で行われずに，わざわざ近くの森に設定されるのか。また奪われた王妃のあとを追ってゴーヴァンはただちに出発するが，かれの前にはすでに疲労した馬に乗る未知の騎士（実はランスロ）がいる。一体ランスロはどこにいて，どのようにして王妃の略奪を知ったのであろうか。本文には何らの説明もない(1)。作品の中でのこれらの前後の撞着，不明瞭さはクレチアン・ド・トロワの用いたと考えられる書記のあるいは口頭の伝承に由来するとされる。そこではすでに他界への訪問の神話的な意味が不明瞭となり混乱してしまっていたのである(2)。

そこで本論では『ランスロまたは荷車の騎士』とその先駆となる物語の痕跡，あるいは同じテーマをもつ作品を取り上げて比較を試みてみたい。テーマは王妃の略奪と救出に限られる。クレチアン・ド・トロワの作品でいえば，物語の前半部に該当する。というのも，「かれが聞いた話はメレアガンとランスロの最初の戦いでおそらく終っていた。メレアガンは敗北し，ランスロは王妃を連れもどす」(3) はずだったと推定されるからである。

結局のところ本論の主題に即していえば，『ランスロまたは荷車の騎士』を含む類似の物語の図式は次のようなものになる。「なぞの異人が，結婚した女性しばしば妖精の出自をもつ女性を自分のものだとして要求する。かれは女を策略によって，とりわけ〈強いられた約束〉に訴えて手に入れるか，あるいは力づくで彼女を奪い，超自然の国に連れ去る。夫は略奪者を追跡し，ほとんど乗り越えがたい障害に打ち克って，近づくのも困難に見えた国に侵入し，囚われた妻を取りもどす」(4)。

---

(1) これらのあるいはその他の前後の矛盾については以下を参照。Gaston Paris, 〈Etudes sur les romans de la Table Ronde, Lancelot du Lac〉, *Romania*, XII, 1883, pp.483-485; Jessie L. Weston, *The Legend of Sir Lancelot du Lac*, London, David Nutt, 1901, pp.43-44; James D. Bruce, *The Evolution of Arthurian Romance from the Beginnings down to the Year 1300*, 2 vol., Göttingen, 2nd edn, 1928 (repr. Gloucester, Ma., Peter Smith, 1958), vol.I, pp.195-196. ただしフラッピエは，これらの不統一をまったく否定はしないものの，むしろ作者は王妃の探索と救出という一挿話に物語を限定してその枠内では一貫性をもたせ，数々の冒険はそれ自体としてではなく，登場人物の性格の描写，内面の表出に利用しているにすぎないと述べている（Jean Frappier, *Chrétien de Troyes*, Paris, Hatier, 1968, pp.132-134)。

(2) Gaston Paris, art. cité, p.485; Jessie L. Weston, *op. cit.*, p.44; Roger Sherman Loomis, *Arthurian Tradition and Chrétien de Troyes*, New York, Columbia University Press, 1949, p.24; Jean Frappier, *op. cit.*, p.132.

(3) Gaston Paris, art. cité, p.515. Cf. Jean Frappier, *op. cit.*, p.132.

1 『荷車の騎士』の物語

図式は図式として，今すこしくわしく以下にクレチアン・ド・トロワの作品の内容を見ることにする[5]。『荷車の騎士』はこの図式に大きくは従いながらも，当然のことながらそこから離れるところ，細部において異なるところがある。作者による付加がなされ，文飾が豊かになり，心理描写がなされることはいうまでもない。

キリスト昇天祭のおり，アーサー王は宮廷に祝賀の宴を張った。食事のあともアーサー王は臣下の者たちと広間に残る。王妃とみやびな貴婦人たちも加わっている。配膳の仕事についていた家令のクーはまだ食事の最中である。

その時突然武装した騎士があらわれる。王の前に進み出て，あいさつもせずに王に呼ばわる。この国の騎士，貴婦人と娘を獄に囚えているぞ。かれらを救う力も富もあるまいとさらに王を挑発する。王はなすすべもなく，災厄に打ちひしがれる。騎士は広間を去りぎわに戸口から言い放つ。ひとりでも信頼に足る騎士がここにいて，わたしの向かう森に王妃の供をして来るならば，そこで待とう。もしそこでわたしと戦って打ち勝ち王妃を連れもどすことになれば，わたしの国に囚われている者をみな返そう。これを聞いて宮廷中の者たちは動転した。

挑戦の言葉は食事をしているクーの耳にもとどいた。怒った素振りを見せて，なにを思ったかかれはいきなり今日かぎりで暇をいただきたいと王に申し出る。なにをいっても聞きいれないクーに困りはてて，王は王妃に説得をたのむ。王妃は懸命に，最後にはクーの足元に身を投げだして，王のそばにとどまるようにと嘆願する。クーは王と王妃が自分の望むものを前もって認めるという条件で宮廷に残ることを約束する。その条件とは，王妃を自分にあずけて森で待つ騎士のあとを追うというものであった。王も王妃も困惑したが，前言をひるがえすわけにもいかず，心ならずも王妃をクーに任せないわけにはいかなかった。

一同の嘆きの中で，武装したクーと王妃は出発する。王をはじめみなが茫然として手を

---

(4) Jean Frappier, *ibid.*, p.134. ガストン・パリスは起源となる物語について，同趣旨のことをより簡単に述べている。「死者の国の王による王妃の略奪がまず取り上げられ，彼女の夫があらゆる障害にもかかわらず，探索におもむき，彼女を連れかえる」(Gaston Paris, art. cité, p.514)。なお王妃の誘拐と救出を主題とする多くの物語の図式的研究として次のものがある。Gertrude Schoepperle Loomis, *Tristan and Isolt, A Study of the Sources of the Romance*, 1913, 2 vol., repr. New York, Burt Franklin, vol.Ⅱ, pp.528-545.
筆者は主にケルトの伝説，物語における他界への訪問譚を別に扱った（拙論「他界に行った人の物語」『国府台経済研究』第18巻第２号，千葉商科大学経済研究所，2007年，57-114ページ)。ケルトの二三の「航海譚」，「エーダインへの求愛」，「ヘルラ王」，「オルフェオ卿」などである。ランスロの王妃を求めての冒険行も他界訪問譚の系列に属するもので，図式的には「エーダインへの求愛」がもっとも近い。本論は上記の拙論の続編をなすものである。

(5) テキストとしては詳細な注が付いて比較，参照に便利な次の版本を用いた。Chrétien de Troyes, *Le Chevalier de la Charrette*, Edition bilingue. Publication, traduction, présentation et notes par Cathrine Croizy-Naquet, Paris, Champion, 2006,〈Champion Classiques〉. 以下クレチアン・ド・トロワの作品は『荷車の騎士』と記す。邦訳には『ランスロまたは荷車の騎士』神沢栄三訳（『フランス中世文学集　２』白水社，1991年）がある。ただし邦訳は底本が異なる。

こまねいていたとき，ゴーヴァンはふたりを追跡するよう提案する。王を先頭に，二頭の替え馬を用意したゴーヴァンと臣下たちがあとに続く。森に近づくと，乗り手を失ったあわれな様子のクーの馬が森から出て来るのをみなは見る。

ゴーヴァンがひとり先に進むと，全身に汗をかき疲れ切った馬に乗った騎士に出会う。二人はあいさつをかわす。騎士の頼みでゴーヴァンは替え馬を一頭与える。騎士はたちまち森に去って行く。ゴーヴァンもあとに続く。やがてゴーヴァンは貸し与えた馬が死んでいるのを見る。あたりは多くの騎士たちによる激しい戦闘の跡が生々しい。道をいそぐと，完全に武装した騎士が徒歩でひとり歩いているのに出会う。

騎士は一台の荷車とそこに乗る小人に行き合う。小人に王妃の行先をたずねると，小人は荷車に乗れば明日までに教えると告げる。当時荷車に乗る者は罪人と見なされたので，悩むものの，はずかしめよりも愛がうちかち，かれは一瞬の迷いののち荷車にとび乗る。追いついたゴーヴァンは慎重にも荷車をことわり，馬で小人のあとを追うことにする。

三人はある城につく。荷車に乗った騎士は町の人々にさんざんにあざけられる。小人はゴーヴァンと騎士を町でおろして去ってしまい，その後どこに行ったかは誰も知らない。騎士は城の王女の冷やかな迎えを受ける。分不相応として禁ぜられた寝台に休んでいると，騎士は天井から飛んでくる炎の槍の試練にさらされる。かれにとってはなにほどのことでもなく，難なく槍を避けて真の勇者であることを証明する。

翌朝かれは王妃を連れた巨人の騎士を塔の窓から見かける。彼女の姿を目で追うあまり，身をのり出してあやうく窓から落ちるところであった。ゴーヴァンと騎士はいそいで武具をつけ王妃の一行を追う。朝の一時課まで追跡すると，十字路でとある乙女に会う。彼女は問われて，王妃を奪った者がゴールの王の息子，メレアガンであることを明かす。この国へは王ボードマギュの許しなしには誰も入れない。しかし「水中の橋」か「剣の橋」を渡って行くことはできる。乙女はそれぞれの橋にいたる道を指し示す。ゴーヴァンは水中の橋を，騎士は剣の橋を目指して行く。

荷車の騎士は王妃への思いで忘我のまま先に進み，浅瀬にいたる。浅瀬に入るのを制止されたのにも気づかず，馬から水に落とされる。われに返って浅瀬を守る騎士と戦い，かれに勝つ。相手のかたわらにいた乙女と騎士は憐れみをこい，荷車の騎士は相手を許し，その場をはなれる。

晩課のころ別の美しい乙女に会う。共寝をするという条件で館に泊めると彼女は申し出る。豪華なしかし人っ子ひとりいない城に到着し，食事を共にする。寝台に横になるまでの間待たされていると，乙女の悲鳴を聞きつけ，荷車の騎士は助けにかけつける。乙女はひとりの騎士におそわれていて，配下の者が荷車の騎士を戸口で待ち伏せている。かれは乱暴者をすべて打ちこらす。しかしこれらすべては演出された場面のようで，かれの勇武が証明されると，乙女はみなを引きさがらせた。騎士は約束を守って乙女と寝台を共にする。乙女は相手が道心堅固なのを見て，自分の寝室にもどる。

翌朝乙女は荷車の騎士に守られて共に出発することを望み，受け入れられる。道の途中にある泉を避けて進もうとする乙女にさからって，騎士はまっすぐ進もうとする。泉の敷石に置かれた櫛を発見しじっと見入る。乙女は櫛が王妃のものであることを明かす。騎士は櫛の歯の間に残された髪の毛を取り，何物にも代えがたい宝としてふところに入れた。

さらに狭い道を先に進むふたりの前に若い騎士があらわれる。長くこの乙女を愛してい

ながら拒まれ続けてきたこの騎士は，今や好機とばかり彼女を連れ出そうとする。片や乙女を奪おうとし片や彼女を守ろうとする二人の騎士は広い野原に出て戦うことにする。野原では男女が遊び興じていた。そこに居合わせた騎士の父親は息子の戦いを力づくでとめる。荷車の騎士と乙女はただちに出発する。とめた理由を知るべく父子も二人のあとを追う。

先に進むと一行はとある教会につき，騎士はそこで祈りをささげる。ひとりの老僧に壁で囲まれた墓地についてたずねる。その墓地には将来ゴーヴァンやイヴァンなどが眠るべき墓がある。いっそう立派な大理石の墓には次のような墓碑銘がきざまれている。この墓石をひとりで持ち上げる者は誰であれ，ひとたび入ったら二度と出られない国に囚われた人々を解放するであろう。墓石は七人の大の男の力をもってしても持ち上げられないのに，騎士はやすやすと持ち上げた。あとから来た父と子はこの話を僧から聞き，かれが選ばれた騎士であることを知る。子は父の忠告どおり騎士を追うことの無益をさとり，かれとの戦いを断念する。ふたたび騎士と並んで馬を進める乙女は，ぜひともかれの名を聞こうとするが拒絶される。乙女はここで騎士のもとをはなれ，彼女はこののちふたたび物語の中で姿をあらわすことはない。

乙女も去りひとりで進む荷車の騎士の前に，今度は狩りを終えた郷士が森からあらわれる。かれは一晩の宿を貸すことを申し出る。妻と七人の子供たちも騎士を歓迎する。かれらはローグル王国（アーサー王の支配する国）の生れで，今はここに囚われているのだ。郷士はかれが誰でどこの国の者かをたずねるが，騎士の名を聞こうとはしない。かれは異国の者が一度来たら出られない，入ることはできてもとどまらなければならないこの国の慣習を説明する。ただしひとりがこの国から出れば，すべての人々も自由になる。騎士が王妃を解放するために来たのだと知ると，郷士は助力を申し出る。郷士のすすめる安全な道をしりぞけ，騎士は近道である危険な「石のあい路」を選ぶ。

郷士の二人の息子が案内に立つ。一行は日の出と共に出発し，馬一頭がようやく通れる石のあい路に来ると，ひとりの騎士とその部下がやぐらから飛び出す。荷車に乗ったことでさんざんに悪口をあびせる相手を騎士は一撃のもとに倒す。奇妙なことに部下たちは荷車の騎士を斧で攻撃する振りをするだけである。三人はおかげで難なくそこを通る。

やがてひとりの男があらわれ三人を宿に案内する。盾持があらわれ，解放者が来たといううわさにはげまされて勢いを得た囚われのローグル国の人々の反乱を告げる。案内する男を先頭にしてかれらはあるとりでに入るが，前後の門をしめられ，中に閉じこめられる。魔法にかけられたのかと疑う。騎士はかれを育てた妖精の贈り物である魔法の指輪を取りだす。指輪の教えるところによれば，かれらは魔法にかけられたのではなく，これはただの現実の事態にすぎない。三人は剣を抜いてとびらをたたきこわす。双方とも千を数える騎士が戦っているのを見る。三人はローグル国の囚われ人に味方して，戦いにうって出る。解放者が来たとの知らせを聞くと，反乱を起した側には喜びと勇気がわきあがる。日が暮れて夜のやみがせまり，両陣営は引きさがる。囚われの人々は救世主ともいうべき騎士をぜひとも自分の家に泊めようと，仲間内で争うほどである。ともかくひとりの騎士の家に歓待を受けて三人は泊まる。

翌朝三人は出発する。一日馬を進めてとある騎士の館に迎えられる[6]。家族の下にも置かぬあたたかいもてなしを受け，食卓につく。そこに武装した騎士が戸口の外にやって

来る。恥も知らずに荷車に乗ったことについて騎士を嘲弄し，剣の橋を渡ろうとする者のおろかさをあざける。荷車の騎士は相手の挑戦を受けて立つ。二人の騎士の槍試合，ついで剣をもっての戦い，馬が倒れてからの徒歩の戦いと型通りの決闘がくりひろげられる。追いつめられてとうとう相手は降参しゆるしをこう。さんざんのこれまでの嘲弄にたいする代価として，荷車に乗ることを要求する。外のことはいざ知らず荷車に乗るくらいなら死ぬ方がましと敗者は訴える。そこへ鹿毛のらばに乗った乙女があらわれる。代価をいつか払うからぜひとも騎士の首がほしいと要求する。双方の間に立って困惑した荷車の騎士は再度戦うことを提案する。ふたたび相手は敗北しあわれみをこうものの，今度は荷車の騎士は相手の首をはねる。首を乙女に渡すと，乙女は返礼を約束して去って行く。一騎打ちを見守っていた家族は大いに喜び，中断されていたもてなしが再開される。倒された荷車の騎士の馬に代えて新しい馬が提供される。みなは寝につく。翌朝三人は騎士の家族に別れを告げて出立する。

その日三人は日のかたむくまで進み，日暮れに剣の橋に到着した。下を流れるのは深く速い「悪魔の河」ともいうべき流れであった。河の上には槍二本の長さのするどい剣が掛けられている。向こう岸には二頭のライオンが岩に鎖でつながれているのが見える。あまりの恐ろしさにつき従う二人の兄弟は騎士に思いとどまるように進言する。従者の忠告に感謝しつつ，騎士は河に落ちずによりたしかに橋を渡るため手足の防具をはずす。手足を傷つけながらも騎士は橋を渡りきる。するとたしかに見えたはずの二頭のライオンは姿かたちもない。目の前に例の魔法の指輪をかざして見ると，二頭のライオンの幻影にまどわされていたことがわかる。傷口からしたたる血をぬぐいながらふと見ると，かれの前には壮麗な塔が立っている。

ボードマギュとメレアガンが塔の窓に寄りかかって騎士が橋を渡るのをながめていた。

これほどの力と勇気を示す騎士を見て，ボードマギュは息子のメレアガンに戦いをあきらめ王妃を返すようにさとす。しかしかれの説得は無駄であった。愛する人をやすやすと他人に返すことなどできはしない。

善良なボードマギュは騎士を歓迎し，手足の傷をいやすためにしばらく休養するようにすすめる。騎士は好意をいれず，今日あすにもメレアガンと戦いたいと主張してゆずらない。翌日ふたりは戦いの場にあらわれる。ボードマギュと王妃は塔の上にいて，国中から集まった双方の側の人々と共に，決闘を窓から観戦する。馬上の槍の戦い，徒歩の剣の戦いと続く。前日に受けた傷のために荷車の騎士は次第に劣勢となる。かしこい娘がいて，王妃に騎士の名をたずねると，「湖のランスロ」（Lanceloz del Lac，v.3666）と王妃は答える。娘は大声でランスロの名を呼び王妃の存在を知らせると，王妃の姿を見てランスロは勇気百倍し敵を追いつめる。息子を心配したボードマギュは王妃に決闘の中止を求め，王妃はそれを受けいれる。王妃の意向にそってただちにランスロは戦いをやめる。みずからの敗北を認めず空威張りするメレアガンは王の家来たちによって引き止められる。

一年後の今日もう一度アーサー王の宮廷で雌雄を決するという条件で，王妃は解放される。囚われの人々のひとりが国を出れば，他の者も出て行くのがこの国の慣習である。囚

---

(6) のちに騎士は「生れたローグル王国からここに来たのはずいぶん前のことです」（vv.2961-2962）と述懐しているから，この騎士の家族もゴールの国に囚われた人である。

われた人々の喜びには限りがなく，すべての者がランスロを祝福する。ボードマギュはランスロを王妃のもとに連れて行く。

ボードマギュと王妃の介入で一旦は決闘は中断され，一年後に延期されることになった。その後物語は王妃とランスロのあいびき，小人の策略によるランスロの幽閉，メレアガンの妹によるランスロの救出などの冒険と事件が続く。ちょうど一年後にアーサー王の宮廷でランスロとメレアガンの再度の決闘がおこなわれ，ランスロはメレアガンの首を落として結着する。

ただし王妃の略奪と解放の話だけに着目すれば，ボードマギュの要請により中断はされたものの，ゴールの国でのランスロの実質的な勝利の時に物語の結末はついている。というのも「この国の慣習によれば，囚われ人のひとりが出国するや他の者もすべて出国することになっていた」（vv.3907-3909）と作者みずからも注しているからである。囚われていた人々にとってもみずからの解放はもはや既定のことがらとなっていた。だからこそランスロのもとに集まり，「すべての者はランスロを祝福した。その時かぎりない喜びがあったはずと考えてさしつかえないし，疑いもなくそのとおりであったのだ。」（vv.3910-3913）事実その後しばらくして，王妃と水中の橋であやうくおぼれかけるところを助けられたゴーヴァンと囚われていた人々はアーサー王の宮廷にみなの歓呼のうちに帰りつくのである。アーサー王の宮廷での再度の決闘という条件はあるものの，王妃はここで解放されて誘拐譚は終わったものと見なしても誤りではない(7)。

2　森の中の誘拐と「強いられた約束」

もとにもどってあらためて物語にそっていくつかの問題に触れてみたい。

まず物語は，キリスト昇天祭にアーサー王が宮廷で挙行した祝宴の時にはじまる。「キリスト昇天祭の日，アーサー王は自分の心行くまでに豪華に美々しく，また王にふさわしく豪勢に宮廷の宴を設けた」（vv.30-33）のである。物語がアーサー王の宮廷ではじまり，数々の主人公の冒険を経てアーサー王の宮廷で幸福な結末をむかえるのは，同じ作者の他の作品にも見られる定型的なものである。冒険が特定の祝祭日に起きるのもほぼ定められたことである。

ところでキリスト昇天祭は復活祭後四十日目にあたり，四月から五月の春のおとずれ（もっとも中世フランス文学ではしばしば夏 été のおとずれと表現される）を知らせる季節であった。これはケルト人の重要な祭りの日ベルティネ（Beltaine 五月一日）にもほぼ重なる。だからといってケルト人の祝日とこの物語を結びつけて，今ただちに物語のケルト起源を主張するのはあまりに性急というものかもしれない。春の到来は誰にとっても喜ばしいことなのだ(8)。

木々に緑がよみがえり草花が咲く五月とメレアガンが挑戦者を待ちうけるのが森であったことはつながりがあるのであろうか。アーサー王の宮廷に乗りこんだメレアガンは，さ

(7)　Gaston Paris, art. cité, p.515.

(8)　ただしのちに見るようにトマス・マロリーの『アーサー王の死』では，王妃は五月の花つみの最中に誘拐される。

んざんに王を嘲笑し挑発したあげく，こういい放つ。「王よ，もしこの宮廷にこれはと頼む騎士がいて王妃をかれに委ね，わたしの向かう森まで彼女の供をさせるならば，そこで待とう。そしてこう約束する，わたしと戦って王妃を勝ちとり連れもどすことになれば，わたしの国にとらえられているすべての囚人をお返ししよう」(vv.70-79)。

メレアガンはなぜか宮廷でみなの面前で相手と戦おうとはしない。わざわざ森にまで王妃を連れて相手の騎士を招きよせている。これは作品中での不明な点の一つとされている[9]。のちに触れるように，『ランツェレット』では王妃は白鹿狩りの最中に誘拐され，トマス・マロリーの『アーサー王の死』では彼女は森の中で奪われる。

森の中での誘拐が本来の古い形であった可能性が高いと今はいっておこう[10]。あるいはエウリュディケーやペルセポネーの草原での死，誘拐にならったものであろうか。

クレチアン・ド・トロワが意図的に誘拐の場面を森に移したとすれば，その理由が想像されなくはない。本来はメレアガンが用いたかもしれない「強いられた約束」の策略をクーに移しかえて語ったために，宮廷の場面を作者はあまり長引かせたくなかったであろう。後々の物語の進行のためにもここではぜひともクーに一役買ってもらいたかった。緊張した場面であるからこそ，余計にユーモアを加えたかった。英雄のかたわらにあって，かれを引き立てる役者も必要であった。また最後の黒白をつけるはなばなしい決闘をそれにふさわしいアーサー王の宮廷で戦わせたかったので，くり返しをさけるためにも最初の戦いの舞台を宮廷に設定しにくかったとは考えられないだろうか。

メレアガンの挑発と挑戦に対してアーサー王をはじめとする宮廷中の騎士は，「宮廷中がそのために動転した」(v.81) とあってなすすべがなかった。本来ならば誘拐者であるメレアガンが用いてもよかった「強いられた約束」の術策に代えて，王妃の運命は森での一騎打ちによって決せられることになる。原話がすでにそうなっていたのかもしれない。しかし元来このモチーフを好むクレチアン・ド・トロワは，ここで「強いられた約束」を捨て去るにはしのびなかった。「強いられた約束」の行使はクーの手に移される。通常の手段では手に入れがたい許しを乞う策である「強いられた約束」といっても，その用い方や意味合いは一様ではない[11]。

王の軽はずみな一言のために王妃を奪われることもあれば，結婚相手を求めるための騎馬試合の承認というささやかなものもあったりする[12]。郷士の娘との結婚を求める幸福な要求にも使われるし[13]，内容を本人自身も決めていない文字通りの「白紙の委任」となることもある。

物語の中では「強いられた約束」は，多くは場面の急転を引き起こし，物語の進行に活力を与える作用がある。古くから使われてきたしたがってやや定型化したこのモチーフを

---

(9) Jessie L. Weston, *op. cit.*, p.43.

(10) *Ibid.*

(11) 「強いられた約束」については次を参照。Jean Frappier, 〈Le motif du《don contraignant》dans la littérature du Moyen Age〉, dans *Amour courtois et Table Ronde*, Genève, Droz, 1973, pp.225-264.

(12) Chrétien de Troyes, *Le Chevalier de la Charrette, op, cit.*, vv.5392-5401.

(13) Chrétien de Troyes, *Erec et Enide*, éd, par Jean-Marie Fritz, dans *Chrétien de Troyes, Romans*, Le Livre de Poche, 1994, vv.629-680.

『荷車の騎士』という物語の叙述に巧みに織り込んだクレチアン・ド・トロワの手腕は中でも出色の出来であると思う。ここではこのモチーフにからんで，アーサー王と王妃とクーの三人三様の人物像と心理が透けて見えてくる仕掛けになっている。

傲岸な騎士の挑戦は離れて食事をしていたクーの耳にも達した。かれは食事を中断し，怒りにかられたかのように王の前に進み出ていう。「殿，長い間忠実に誠意をもってお仕えしてきました。しかし今はお暇をいただき，ここを去って二度とお仕えすることはないでしょう」(vv.87-90)。王はかれの言葉を聞いて一瞬茫然としたものの，気を取りなおしてたずねる。「それは正気かそれとも冗談かね」(v.96)。しかしクーの答えは変わらない。「家令殿，これまでのように宮廷に残ってくれ，おまえをとどまらせるためなら，すぐにもおまえに与えぬ物はこの世にはないのだ」(vv.106-110) とまで言って，王はクーを説得する。与えぬ物はこの世にはない，何でも与えようというのであるから，ここでクーは自分の望みを存分に述べれば目的を達せられるはずなのに，かれは頑としてまだあとには引かない。王は困り果てて王妃のもとに行き，事の次第を話す。「わたしのためにはしたくないことも，そなたの頼みとあってはかれはすぐにするであろう」(vv.120-121) からである。「わたしのためにはここに残らなくても，そなたのために残るようにとりなしてくれ」(vv.123-124)。もはや王の権威よりも王妃のそれを頼みにするしかない。嘆願してだめならば，「いっそかれの足元に身を投げ出してくれ」(v.125) とまでいって，王妃をかれのもとに送り出す。

一体王のクーに対する態度はどこからくるのであろうか。「もしかれを失うようなことがあれば，わたしの喜びもなくなるだろう」(vv.126-127) とも王はいっている。アーサー王にとってクーは欠かすことのできぬ人物なのである。ところが『荷車の騎士』同様クレチアン・ド・トロワの他の作品でも，概してクーは軽率で身の程をわきまえぬ，差し出がましく口さがないトリックスター的人物としてあらわれる。アーサー王の手離すことのできない近臣と軽はずみな人物像はどうにも調和しない。

しかし一つ前のウェールズの伝承ではクーはアーサー王の家令で古くからの重臣であるとともに，軽率どころか勇武の聞えも高い[14]。かれは常に王のかたわらにあって戦いと冒険を共にしている。のちの物語の中ではかれはアーサー王の乳兄弟ともされている。股肱の臣，乳兄弟ともされる人物をアーサー王は失うわけにはいかない。思うにこの場面ではクーの持つ新旧の二つの性格を作者は使い分けているか意図的に混在させているのだ。王の言葉の中には神話的起源をもつ英雄としてのクーがあらわれ，クー自身の行動には新しい人物像が形象されている。

王の意を体して，王妃は言葉を尽くして再々クーに宮廷に残るように嘆願するが無駄である。そこで王にいわれたとおり，「王妃はかれの足元に一思いにひざまずく」(vv.148-149)。クーは王妃を立ち上らせようとするが，今度は王妃が願いが聞き届けられるまではとゆずらない。そこでクーはあたかも困り果てたかのように，やむを得ず譲歩するかのように，宮廷に残ることを約束した。ただしその条件は，「王が前もってかれの望むことを認め，また王妃自身もそうする」(vv.155-157) ということであった。王のもとにもどっ

---

(14) たとえば「キルッフとオルウェン」(『マビノギオン』中野節子訳所収，JULA 出版局，2000年，157-214ページ) を参照。

た王妃はクーを引きとめたことを報告し，その条件を述べる。王は安堵のため息をほっとつき，「何であれ，クーの求めることに従うであろう」（vv.169-170）と約束する。ここで初めてクーは自分の望みを披瀝する。「ここにいる王妃をわたしにあずけることをお許しください。森でわれらを待つあの騎士のあとを追います」（vv.176-179）。これを聞いて王は困惑したが，王に二言があってはならず，クーの求める使命を許した。しかしいらだち，苦しんでいることは王の表情から隠しようもない。王妃も落胆した。家中の者すべてにとってもクーの望みは思い上った狂気の沙汰としか思えない。

しかし約束どおり王妃はクーに託された。打ちひしがれ，ため息をつきつつ，王妃は馬に乗る。その時誰にも聞えぬように彼女はつぶやく。「ああいとしい人よ，もしそなたがこうと知っていたら，異議も申し立てずに一歩たりともわたしを連れ去らせたりはきっとしないものを」（vv.209-211）[15]。

いずれにせよクーは所期の目的を達した。王の側近であるが故の王の信任を利用し，心にもないいつわりの口実を設けて，説得の役を負わされた王妃，ついで王から望むことはすべてかなえられる白紙の約束を取りつける。その時を待って，かれの望みが王妃を護衛してメレアガンと一戦を交えることであるのを明かす。事はすべてクーの計算どおりに進む。王はもはや前言をひるがえすことはできない。たしかにこのような策略を用いなければ許されない望みであったのだろう。その後の王と王妃とみなの意気阻喪ぶりから，クーの望みが思い上ったものであることが知られる。かれはみずからの武勇に頼むところがあったというより，生来の功名心，無謀さからこのような行動に出たのであろう。かりに王の約束を取りつけることができても王妃の拒絶に会うことを恐れて，わざわざ王妃からも同じ約束を得る慎重さあるいは狡知をもかれは持ち合わせている。この物語では「強いられた約束」は脈絡もなくやぶから棒に持ち出されるのではなく，クーの計算したとおりのある必然性をもって進行するところに作者の示す手腕がある[16]。

王妃をはじめとするみなの不安は適中し，クーの行為は予期したように悲惨な結末をむかえる。王妃を送り出したのち，ゴーヴァンの叱咤と激励を受けて王ははじめて王妃のあとを追うという行動に出る。しかし一行が森の近くで見たものは，手綱を切られ，鐙の革は血に染まり，後輪が砕けたクーの馬だけであった。戦闘の場面がおそらくは意図的に省略されているために，クーの敗北は一層印象的でさえある。こうして王妃と負傷したクーはメレアガンによってかれの城に連れ去られる。

3　王妃とメレアガンの関係およびランスロの使命

前半部を通じてもっともわかりにくいことの一つは，なぜメレアガンは王妃を奪おうと

(15)　王妃の独白が誰に向けられたものかは写本によって異なる。この版では王妃はランスロに呼びかけている。この独白によって王妃とランスロの密かなつながりが暗示される（*Le Chevalier de la Charrette, op. cit.*, p.81, note 16）。他方では恋人の出現や来訪を心に念じただちにかなえられる古謡の「お針子の歌」（chanson de toile）や「短詩（lais）にある，「念ずればかなう」式の民俗的モチーフを借りてきたものと解することもできる。王妃の呼びかけがランスロを出現させ，同時に王妃とランスロの関係を示すのである。こう解することによってランスロの突然の出現という奇妙さも物語的合理性をもつことができる（Antoinette Saly, 〈Motifs Folkloriques dans le *Lancelot* de Chrétien de Troyes〉, dans *Image, Structure et Sens*, CUERMA（*Senefiance* N° 34）, 1994, pp.33-47）。

するのかということである。物語がはじまると同時にメレアガンは王妃を的に決闘を宣言するものの，その理由をメレアガンも作者もあきらかにしない。このタイプの類話では王妃を奪う者は，前世で王妃の夫であった[17]，王妃の結婚前から王妃と婚約していた，あるいは長い間王妃を愛していたことになっている[18]。そして当初からそのむねを告知し，みずからの正当な権利を主張して王に挑戦している。ところが『荷車の騎士』にあっては事情がちがう。王妃を奪う理由が読者にあかされるのは，もはや誘拐の理由の詮索など忘れかけたころである。

剣の橋を渡り終えたランスロの勇武を塔の上から見て，ボードマギュは賞讃をおしまない。一方メレアガンはといえば，「かれは怒りと無念さで顔色を変えた」（vv.3164-3165）のである。ボードマギュは息子に言葉をつくして王妃を返すようにさとす。眼前の光景にうろたえたのか，父への激しい反駁の中でわれを忘れてメレアガンは口走る。「父上のいうことなどはなにほどのことか。もともとわたしは世捨て人でも賢者でも慈悲深い者でもないのだし，もっとも愛する人をかれに返すほどに名誉を重んじたくもない」（vv.3281-3285）。ここではじめてメレアガンが王妃を奪った動機がかれ自身の口から語られる。激高した中でのわずか数行の告白で，不用意な読者には見すごされそうな文脈の中におかれている。父親のボードマギュとの会話の中でメレアガンがおもに言い立てているのは，父親に対する反発であり，ランスロに対する敵意である。しかもこれは王妃に対するメレアガンの恋慕が表明される唯一の個所であるという[19]。

作者は通例の類話のように冒頭から王妃を連れ出そうとする者の王妃への権利，愛を宣言したりはしない。のちの詩行に誘拐のそもそもの動機らしきものをひそかにすべりこませている。物語は全体としてメレアガンの愛など無視されているかのように進行する。推測するならば，おそらく作者は王妃とランスロの至純の愛を全編のテーマにした作品で，王妃とアーサー王の関係[20]，王妃とメレアガンの因縁などは物語の統一性を分散させる

---

⑯ 『荷車の騎士』での複雑な「強いられた約束」と対照させるために，もっとも理解しやすい例とされる『謎の美少年』の冒頭に出てくる場面を紹介する（Renaut de Beaujeu, *Le Bel Inconnu*, éd. par G. Perrie Williams, Paris, Champion（CFMA）, 1967, vv.11-227）。
アーサー王が戴冠式を挙行したあとの饗宴にひとりの若者（実はゴーヴァンと妖精の間の子，ガングラン）が突然馬で乗りつけ，「自分の求める最初の約束」（v.85）を王に要求する。粗野で性急であるが率直な若者の要求に王はただちに応ずる。宴も果てぬうちに，優美な乙女が宮廷に到着する。彼女はある王女の使いで，危機から王女を救ってほしいと王に嘆願する。それには，ひとりの最良の騎士がいて，「恐怖の接吻」（le Fier Baissier, v.192）の冒険によって大蛇にされた王女を魔法から解放しなくてはならない。恐ろしさにみながしりごみする中で，ガングランが進み出て，今こそ先の約束をかなえてほしい，自分が王女を救いに行くと願い出る。ガングランの若さ故に引き止めるものの，結局王は申し出を認めざるをえない。最良の騎士を求めて最悪の騎士を与えられた事態に腹を立て，乙女は宮廷を去る。若者は勝手に乙女の供をする。こののち若者は数々の武勇を発揮し，「恐怖の接吻」の試練も乗りこえて，王女を救うことはいうまでもない。
この作品での「強いられた約束」の特異な点は，約束がなされてもただちに約束の内容を申し立てるわけではないことである。白紙の約束をアーサー王から受け取った時には，何を要求するかはガングラン自身にも定まっていなかった。間を置いて，使者が救いを求めた時に，はじめて与えられた権利を行使するのである。あらかじめ何かを目的とした意図した行為ではなかった。

⑰ 前掲拙論とくに「6　エーダインへの求愛」（89-96ページ）を参照。

⑱ のちに見る『ランツェレット』およびトマス・マロリーの『アーサー王の死』の場合。

⑲ *Le Chevalier de la Charrette, op. cit.*, p.241, note 158.

⑳ アーサー王は冒頭と最後の場面にしか登場しない。

ものとしてきらったのではなかろうか。ランスロと王妃の純愛に夾雑物をはさむ場面は，できれば排除したかったにちがいない。三人の男に愛された王妃の立場は微妙であり，事実グニエーヴルはその微妙な立場を他の物語，説話の世界では生きてゆく特異なあるいは疑わしい性格の女性なのである。

『荷車の騎士』をもう一つわかりにくくさせているのは，メレアガンと戦って王妃をかちとるならば，「わたしの国に囚われているすべての囚人をお返ししよう」（vv.76-77）とメレアガンが当初から約束していることである。この物語の骨子は奪われた王妃の英雄的主人公による解放であったはずだ。実際ランスロあるいはその他の円卓の騎士はひたすら王妃の救出を目指していて，その他の囚人の身の上を心配している気配はない。にもかかわらずメレアガンのこの申し出によれば，王妃を解放することはただそれだけにはとどまらず，囚われたローグル国の住民すべての解放につながっている。原型の物語からすればこれは逸脱，「見当違いな付加」[21] とも見なされがちである。

作品中ではこれはゴールの国の慣習として説明されていて，メレアガンの意図，王妃の探索者の目的とはかかわっていない。ランスロは王妃のあとを追って冒険を重ねる。ある日かれは森で狩りをする郷士に出会い，家族の住む館に案内される。かれらはローグル国の生れで，長い間囚人となってこの国に閉じこめられている。騎士もまた自分たちと同様の身分になることにかれらは同情する。自分はここから出て行くという騎士の言葉に対して，郷士は答える。「そうすれば他の者もすべて自由の身となって，晴れてここから出て行くことになりましょう。ひとりがこの牢獄から堂々と外に出れば，間違いなく他の者も何の妨げもなくここから出ることができます」（vv.2116-2121）。これはその前の郷士の言葉にある呪われた「慣習」（costume，v.2102）に対応する。慣習によれば，「異国の者がここに来たら，ここにとどまり，この地につながれなくてはなりません。望む者は入ることができますが，ここにとどまらなくてはならないのです」（vv.2104-2108）とある。

一度入ったら二度と出られない国，ただしひとりの英雄があらわれて外に出れば他の者も出て行くことができる国，ランスロが向かうのはこのような慣習をもった国である[22]。この慣習はランスロとメレアガンの戦いが事実上終わったとき，もう一度くり返される。「この国にはひとりがそこから出ると他の者もすべて出て行くという慣習があった」（vv. 3907-3909）。実際この慣習に従い，囚われた人々はランスロを祝福し，みずからの解放の喜びを分かち合い，そのあと王妃と共にローグル国に帰還している。

作者の意図したのは，王妃の解放にとどまらず囚われた人々の救済という崇高な使命をランスロに与えることであったと考えられる[23]。このランスロの「救世主的様相」

---

(21) Gaston Paris, art. cité, p.515, note 4.

(22) 「望む者は入ることができる」（v.2107）とはややつじつまの合わない表現である。それではランスロが剣の橋を苦労して渡ったのが無用の冒険となってしまう。ここではともかく「ここにとどまらなくてはならない」（v.2108）に重点があると考えておこう。あるいはゴールの国には広義と狭義があって，広い意味のゴールの国には誰でも入れるが，その首都ともいうべきボードマギュの城には試練に打ち克った者だけが入れるのかもしれない。他界は遠い島にある地であるとともに，日常生活に隣り合わせて思いがけぬ所にその入口を開くことがある。

(23) ランスロの使命については次を参照。Jean Rychner, 〈Le sujet et la signification du *Chevalier de la charrette*〉, dans *Vox Romanica*, t. 27, 1968, pp.62-65.

(aspect messianique)[24] は，とある教会の墓地にある壮麗な墓の碑銘にすでにきざまれていた。

「ひとりの力でこの墓石を持ち上げる者は，かの地に囚われている人々を解放すべし。そこにひとたび入った者は賢者であれ貴人であれ出ることはできず，また誰も帰ってこない。異国の者は囚われ人となり，この国の者は中に入るも外に出るのも思いのまま」(vv. 1906-1915)。

墓石をランスロはやすやすと持ち上げる。ランスロが囚われの人々を解放することはあらかじめ定められた使命であったことが実証される。

囚われた男女の解放は墓石にきざまれていても，王妃の名はあげられていない。あたかも王妃の救出は人々の解放に付随する出来事のようである。僧はランスロの使命を二度くり返す。誰が墓の下に眠るのかと問われて，僧は答える。「誰も逃れられぬ国に策略によって囚われた人々すべてを解放する者です」(vv.1940-1942)。ただし二度目には他のすべての人々と共に王妃の救出を僧は述べている。「かれは王妃を救いに行き，間違いなく彼女を救うでしょう。そして一緒に他のすべての人々も」(vv.1978-1980)。

また囚われた人々の反乱の中で，人々は解放者への希望を再三叫び（vv.2306-2308, 2419-2422)，ランスロとメレアガンの決闘の日に，囚われた女たちは自分たちを解放する者のために祈り（vv.2586-2589)，戦い終ってからはランスロの勝利をはじめから確信していたことを表明している（vv.3917-3920)。くり返しランスロの囚われ人の解放への使命は語られるものの，ランスロ自身の意思はひたすら王妃の救出にむけられていて，人々の期待に応えようとするかれの自覚は語られていない。作中に述べられるランスロの意思と物語の強調点にはずれが生じている，といって当らなければ複雑な陰影を与えているようだ。

郷士との出会い，囚われた人々の登場とかれらの反乱，囚われた女たちの祈りとランスロの勝利後の人々の喜びの爆発などは，作品に厚みをくわえている。ランスロと王妃とメレアガンのもつれ合った関係の息苦しさから外にむかって読者を解放させる効果をもつものとわたしには思える。ランスロと王妃の宮廷風恋愛にとどまらず，さらに囚われた住民の救済という使命を重ね合わせて，ランスロの人格と勇気を高めることになる。

4　ボードマギュの国は他界か

王妃の連れ去られた国，荷車の騎士ランスロとゴーヴァンが向かった国，ボードマギュのゴール王国とは何なのであろうか。この国は死者の国なのか，ケルトに起源をもつ他界の別な名なのか，近隣の領主の現実の国なのか[25]，さまざまに解されている。問題は王妃の誘拐譚の起源をどこに求めるのか，作者はそれをどう利用し解釈したのか，作中での描写と表現などにかかわって多岐にわたっている。長年議論されてきたことにここで結着

---

(24) Jean Frappier, *Chrétien de Troyes, op. cit.*, p.144.

(25) アレクサンドル・ミシャは王妃をめぐる争いは隣り合う領主間の世俗的，封建的な日常の光景にすぎず，なんら神話的なものではないとしている（Alexandre Micha, 〈Sur les sources de la《*Charrette*》〉, *Romania*, LXXI, 1950, dans *De la chanson de geste au roman*, Genève, Droz, 1976, p.347 et note 3)。ただしこの説は大方の賛同をえているわけではない。

をつけるわけには行かないが，とりあえず出自がケルトの神話・伝説にあるとして話を進めたい。

はじめにゴールの国の特徴と景観を見てみよう。ランスロは炎の槍の試練をいとも簡単に切りぬけ，ゴーヴァンと共に王妃の一行を追う。早朝かれは十字路でひとりの乙女に会い，王妃が誰によってどこに連れ去られたかをたずねる。その国に入るにはいかなる困難にそうぐうし，いかなる試練に耐えなくてはならないかをことわった上で，彼女は答える。「ゴールの王の息子で，強力無双の巨人メレアガンが王妃を奪い，異国の者はもどることのできない王国，いやでも隷属と捕囚のうちに呻吟しなくてはならない王国に押しこめたのです」(vv.637-643)。まずゴールの国は一度入ったら囚われの身となって二度ともどることのできない国である。その国にはボードマギュ王の許しがなければ容易に入ることはできない。

しかしそこにいたるには二つの危険な道があって，一つは水中の橋（li Ponz Evages, v.656）で，もう一つはつるぎのやいばのように鋭い剣の橋（le Pont de l'Espee, v.673）である。乙女はランスロとゴーヴァンに水中の橋と剣の橋にいたる道を示す。

いくつかの冒険と出来事があったのち，ランスロは供をする郷士の息子ふたりと剣の橋のたもとにつく。「日が傾こうとするまでかれらは正しい道を進み，午後も大分すぎて夕ぐれ時に剣の橋につく」(vv.3009-3012)。時は夕ぐれであたりはうす暗く，そこに流れている河はただ恐ろしい。「かれらは恐ろしい橋のたもとで馬を下り，不吉な，色も黒くとどろきわたり，すさまじく重たげな流れを見る。大変みにくく無気味でまるで悪魔の河のよう。とても危険で深く，もし落ちたりしたら，塩からい海に流されぬ者はこの世にいない」(vv.3013-3021)。形容詞を過剰なほどにたたみかけているが，現実の世界と他界とを区切るのにふさわしいもの恐ろしい流れではある。河とそこを渡る橋はケルトの伝承にかぎられるものではないにしても，他界との境界にされるのにふさわしい標識である。

恐ろしいのは流れとそこに渡された剣の橋ばかりではない。万が一にも危険な橋を渡り終えても，向こう岸には二頭のライオンか豹のようなけものが鎖につながれているのが，郷士のふたりの息子をいっそう恐ろしがらせる。「流れと橋とライオンがかれらを恐怖におとし入れ，恐怖のためにふたりは身をふるわせる」(vv.3044-3046)。しかしランスロは供の者が止めるのにもかまわず，よりしっかりと剣の橋に取りつくようにと手と足の武具をはずし渡りはじめる。手足にひどい傷を受けながらも橋を渡ると，たしかに前には見たはずの二頭のライオンはいなかった。恐怖が生み出す幻影にあざむかれ，魔法にかけられていたのだ。たしかに見たはずの物が消え失せたからといって，ただちにそれが他界のしるしとはならない。しかしゴールの国が日常の現実の世界ではなく魔法にかけられた国の証左にはなろう。さらに驚くべきことは，何もなかった空間に巨大な建物が出現したことである。傷口からあふれる血を下着でぬぐっていたとき，突然かれは「自分の前に壮大な塔を見た。これほど壮大なものをかつて自分の目で見たことはない。これ以上の塔は存在しえなかったのだから」(vv.3144-3147)。この塔が向こう岸にいた郷士の息子たちにも見えたのかどうかは語られていない。それどころかランスロが無事橋を渡り終えたのを見て喜び合ったあと，ふたりは物語から姿を消してしまう。ランスロの行動を目撃する証人は郷士の息子たちからボードマギュや王妃に移ったことを意味しているかのようだ。塔の上ではボードマギュと王妃がランスロの英雄的行為の一部始終を見ている。

河の描写とうって変って，塔あるいは天主閣は，ただ見たこともないほど「壮大な」(fort，v.3145，3146）としか形容されていない。ケルトの伝承に忠実ならば，おそらくこの塔はこの世のものとは思われないほどはなやかで，ガラスのようにキラキラと輝いていたにちがいない[26]。ところが作者は過剰な形容をさけ，この塔には多少なりとも現実味を与えたかったようだ。選ばれた人間にのみ突然あらわれる塔は，それ自体ですでに十分に不思議で，他界に属するものと認められたのであろう[27]。そのいくつかを例示してみる。

クレチアン・ド・トロワはのちの作品でも同じような場面を再現している。ランスロと同様にペルスヴァルにも，それまで見えなかったはずの漁夫王の城が突然出現する。ペルスヴァルは冒険を求めてかつて置き去りにした母をたずねようとする。一日中道を進むと丘のふもとに「荒れ狂う深い河を見る」(v.2980)[28]。河には小舟に乗って釣り糸をたれる老人がいる。ペルスヴァルは一夜の宿を求め道をたずねる。

教えられるままにペルスヴァルは坂道を登り，丘のいただきに来た。しかし，「丘のいただきに立ち前方を見守ったが，見えるのは天と地だけである」(vv.3031-3033)。落胆し，いつわりを教えられたことに立腹したペルスヴァルだが，「その時かれの前方の谷間に塔の上層があらわれるのを見た。ベイルートにいたるまで，これほど美しくこれほどどっしりとしたものは見いだせないだろう。四角く，灰色の石で作られ，周囲には小塔があった。塔の前には大広間のある館が，さらにその前には控えの間があった」(vv.3044-3051)。何も見えなかったはずの谷間にまず塔の先端があらわれ，ついで小塔と館など城の全体が目に入る。塔自体は，ランスロが見たものと同様，外観だけを見ればベイルートにいたるまで見いだせない美しいものであったものの，特別に不思議なものではなさそうである。

ここにいたるまでの道すじを考えてみると奇妙なものであった。ペルスヴァルは朝早く出立し，「一日中道を進んだ」(v.2970）わけだから，すでに日は暮れようとしていたであろう。深く流れの速い河に行き当り，水に進み入ることもならず，やむをえずかれは「岸に沿って行くとひとつの岩に突き当り，しかもその岩には流れが接していて，先に進むことはできなかった」(vv.2986-2989)。ところが折よくあらわれて，一夜の宿を貸すという釣り人の指示は次のとおりである。「この岩に開けられた裂け目を登りなさい。上に達すれば，あなたの前の谷間に，川と森の近くにあるわたしの住む館が見えるでしょう」(vv.3023-3028)。ペルスヴァルがはじめに来たときには前をさえぎられて進むことができず，その時には見えなかったであろう岩の裂け目を登れといわれる。かれはその裂け目を通って丘に登ってゆく。この「裂け目」はあるいは「洞穴」を意味するのかもしれない。洞穴の中の道が他界に出る通路となる例は少なくない[29]。

それまで見えなかった岩の裂け目があらわれ，また天と地しか見えなかった所に突如壮

---

(26) Roger S. Loomis, 〈The Spoils of Annwn. An Early Arthurian Poem〉, dans *PMLA*, LVI, 1941, p.913.

(27) Jean Frappier, 〈Féerie du Château du Roi Pêcheur〉, dans *Autour le Graal*, Genève, Droz, 1977, pp.307-322; Antoinette Saly, 〈Le Pont de l'Epée et la Tour de Baudemagu〉, dans *Image, Structure et Sens, op. cit.*, pp.63-74.

(28) Chrétien de Troyes, *Le Conte du Graal* (*Perceval*), publié par Félix Lecoy, Champion (CFMA), 1975.

(29) 例として『オルフェオ卿』(Sir Orfeo）とマリー・ド・フランスの「ヨネック」(Yonec）が挙げられる。くわしくは前掲拙論103-114ページを参照。

麗な塔が目に入る。ペルスヴァルが見た二重の出現は，剣の橋を渡ったランスロにあらわれた塔と同じく他界のしるしを刻されたものである。塔自体というよりもその突然の出現がこの世のものではない。

ペルスヴァルが岩の裂け目を通り抜けたときが，ランスロが深い河にかかる剣の橋を渡ったときと同様，狭義の他界に足をふみ入れた瞬間と考えられる[30]。

城で歓待とそれとは知らぬ試練を受けた翌朝，ペルスヴァルはが起き上ってももはや城中には人影ひとつ見あたらなかった。間一髪で跳ね橋を渡ったあとに橋は上り，呼びかけても誰も答えない。ここにもまた漁夫王の城の他界性が見てとれるのである。

さらにこれに続く挿話からも不在の城の不思議さが強調される[31]。ペルスヴァルは漁夫王の城を出て馬を進めると，まだ新しい馬の足跡を見つける。あとを追って行くとやがて今朝恋人を殺されて嘆いている乙女（実はペルスヴァルのいとこ）に出会う。かれは乙女にあいさつし訳をたずねる。乙女は答えるが，同時に彼女を驚かせたのは，二十五里このかたペルスヴァルの来た方角には宿が一軒もなく，にもかかわらずかれの馬が今飼葉を与えられたかのように元気はつらつとしていることであった。今度はペルスヴァルが驚く番であった。自身も馬も十分に休息をとったように見えても不思議ではない。というのも今ここで人が大声で叫ぶならば，昨晩泊った所からはっきりと聞きとれるはずなのだから。しかし乙女にとっては城はこの付近にはないはずであった。もっとも城の存在とそこに住む漁夫王については乙女は知っていたようだ。人から話を聞いたかどうかして知っていたのだろうが，この辺の作者の記述はあいまいである。この城は時あって，あるいは選ばれた人間にのみ姿をあらわす時空を越えた他界の城なのである。

突然あらわれる城，消える城の例はまだある。トリスタンはイズーに会いたいばかりにマルク王と王妃イズーが滞在するというコーンウォールのティンタジェルの城に向かう。ティンタジェルの塔は始原の時に，「かつて巨人たちが築いた」（v.106）[32] ものという。

「そこでティンタジェルはその昔魔法の城と呼ばれていた。魔法の城とは言い得て妙，一年に二度姿を消すのだから。土地の者であれ誰であれ，いくら目をこらしていても，一年に二度城を見失うと里人は確言する。一度は冬に一度は夏に，と近在の者はいう」（vv. 131-140）。

土地の言い伝えではティンタジェルの城は一年に二度，おそらくは夏至と冬至に姿を隠すのである。里人，近在の者というから，コーンウォールでは消える城は物語の中ばかりでなく民間にも流布していたのである。

5 『ギルダス伝』とモデナの大聖堂の浅浮き彫り

アーサー王物語の本場ともいえるウェールズの学僧カラドック・オブ・ランカルヴァン（Caradoc of Llancarvan）は，やや場違いとも思える聖者伝に王妃の誘拐と救出の断片をすべりこませている。おそらく1136年以前，遅くとも1160年頃に，かれは『ギルダス伝』

(30) ペルスヴァルが河を渡ったという記述はない。

(31) *Le Conte du Graal* (*Perceval*), *op. cit.*, vv.3452-3481.

(32) *La Folie d' Oxford*, dans *Les deux poèmes de la Folie Tristant*, édités par Félix Lecoy, Paris, Champion (CFMA), 1994.

（Vita Gildae）を著わした[33]。ここでは誘拐者はメルヴァス（Melvas），救出しようとするのはアーサー王である。さして長くはない一節なので関連する個所を訳出してみる。

ある島に隠棲していたギルダスは海賊に追われて島を出なくてはならない。

「ギルダスは小舟に乗りグラストニア（Glastonia）に入った。時に夏の国（aestiva regione）ではメルヴァス王が君臨していた。グラストニアの修道院長からしかるべく迎え入れられたギルダスは，同僚と多くの民を教化し，あるべき天の教えの種をまいた。ここでかれはブリタニアの諸王の歴史を書いた。

グラストニアとはすなわちガラスの町であって，その名をガラスから取っており，元来ブリタニア人の言葉でも同じ名をもつ町である。

さてこの町はアルトゥルス小王とかれの大軍によって攻囲された。それというのも前記の暴虐の王によってアルトゥルス王の妻グエンヌヴァル（Guennuvar）が略奪されはずかしめられたからであり，そこに連れ去られたのは難攻不落の地への避難のためで，そこが葦と川と沼地によって守られたとりでであったからである。

戦いをいとわぬ王は一年にわたって王妃を探し求め，とうとう彼女がそこにとどめられているのを耳にした。ただちにかれはコーンウォールとデボンの全軍を動員した。両軍の間にまさに戦端が開かれようとした。これを見てグラストニアの修道院長はひとりの僧と賢者ギルダスを伴って，両軍の間に割って入り，メルヴァス王に奪った王妃を返すように静かに説いた。そこで平和と善意によって返されるべき者が返された。

この事が終わると二人の王は修道院に多くの土地を寄進し，聖母マリア教会を訪れ祈りに来た。修道院長はかれらがなしたさらに今後もなすであろう平和と善意のために，好ましい友好を堅固にした。それから和平を結んだ王はもどると，グラストニアのいとも尊い修道院長に従い，決して聖なる地とその付属地を侵さないことをうやうやしく誓った[34]。」

おそらくはグラストンベリー修道院のために仕事をしていた作者のカラドック・オブ・ランカルヴァンは，聖者伝を通じてギルダスとグラストンベリー修道院の権威を高める目的にすべてを奉仕させている。俗人に対する聖職者と教会の優位を強調する。メルヴァスは「暴虐の王」（iniquus rex）とされ，アーサー王でさえも「小王」（tyrannus）とややおとしめ，「（教会に対し）反抗的な，あるいは好戦的で戦いをいとわぬ」（rebellis）者とする[35]。暴力を事とする王たちに対し，教会の側は静かに説得する言葉の力によって対立する両者を和解させ，その上教会に土地を寄進させて，教会にとって望ましい王の模範例を示している。おそらくは作者が聴いたか読んだかした話に反して，かれは王妃の救出を最終的には聖職者の説得による王妃の返還という平和的解決に造作した。それでもこの

(33) Jean Frappier, *Chrétien de Troyes, op. cit.*, p.134.

(34) Caradoc of LLancarfan, *Vita Gildae*, dans E.K. Chambers, *Arthur of Britain*, 1927, repr. Cambridge, Speculum Historiale, 1964, pp.263-264（Records XX）.カラドックと『ギルダス伝』およびグラストンベリーについてはなお次を参照。Edmond Faral, *La légende arthurienne*, 3 vol., Paris, Champion, 1929, tome II, pp.409-421.

(35) 教会のアーサー王に対する態度および rex rebellis については次を参照。Roger S. Loomis, *Arthurian Tradition and Chrétien de Troyes, op. cit.*, p.14; Martin Aurell, *La légende du roi Arthur*, Paris, Perrin, 2007, pp.539-540, note 27.

挿話がメルヴァスによる王妃の誘拐とアーサー王による彼女の救出の聖職者版であることは，さまざまな暗示の中によくあらわれている。

まずなぜグラストンベリーなのか。いうまでもなくグラストンベリー修道院を称揚するためにちがいない。しかも時はあたかもジェフリー・オヴ・モンマス（Geoffrey of Monmouth）の『ブリタニア列王史』（Historia Regum Britannie），あるいは口頭伝承の中でケルトの伝説，アーサー王の物語が世上の話題を集めていた時代である。グラストンベリーにアーサー王が直接結びつく伝承はそれまで見当たらないにもかかわらず，ぜひともアーサー王をグラストンベリーに引き入れて時の権力者の庇護，巡礼者の支持を取りつけるのが修道院にとっては得策であった。それにはいくつかの好都合なことがあった。グラストンベリーという地名を手がかりに強引にここをアーサー王の故地に仕立て上げようと目論んだのである。前記の引用文中に突然次のような記事が挿入されている。グラストンベリーを「ガラスの町」（urbs vitrea）と解し，しかも昔からウェールズ語でも同じ意味をもつ町であったと結論したのである。

のちの節で地名の由来がもう一度くわしく述べられている。よほど作者はこの事を強調したかったようだ。

「グラストニア（Glastonia）は古くはイニスグトリン（Ynisgutrin）と呼ばれ，今でも土地のブリトン人にはそう呼ばれている。ブリトン語のイニス（ynis）はラテン語の島（insula）であり，グトリン（gutrin）はまさにガラス（vitrea）である。しかしアングル人の来寇以後，ブリトン人すなわちウェールズ人は追放され，元々の語を継承してグラストンベリー（Glastigberi）と名付けられた。すなわちアングル語の glas はラテン語の vitrum であり，beria は civitas である。そこからグラストンベリー（Glastiberia）つまりガラスの町（Vitrea Civitas）となった。」[36]

グラストンベリーの本来の語源はこの土地の支配者の姓であった Glaesting から来たもので，「グレスティングの町」と解すべきものであり，glas（＝glass）とは関係はない[37]。しかも作者はグラストンベリーを先住者のブリトン人の町の名 Ynisgutrin の直訳にすぎないという。作者はまた前にグラストンベリーがあった地方を「夏の国」（aestiva regio）としている。これも元々部族名であった Somerset という地方名を多少の類似にもとづいて Summer（夏）に付会したものにすぎない[38]。

結局メルヴァスは「夏の国」を支配し，そこにあるとりでである「ガラスの町」あるいは「ガラスの島」に王妃グエンヌヴァル（＝グニエーヴル）を連れ去り，閉じ込めたことになる[39]。ふたりを追ってアーサー王は大軍をもって攻めかかる。

ウェールズ人やアイルランド人にとって，神々の住む所，幸運な人間がまれに訪れる他界は海波の島か地下の国に想定された。そこは光に満ちていて，建造物はガラスか水晶のように輝く所である。また他界は常夏の国であるとも考えられた[40]。『ギルダス伝』に記されたわずかな地名からも，この誘拐譚が王妃の他界への誘拐の神話，伝説が背後にある

(36) Caradoc of LLancarfan, *Vita Gildae, op. cit.*, p.264.

(37) Gaston Paris, 〈Etudes sur les Romans de la Table Ronde〉, dans *Romania*, X, 1881, p.491.

(38) Roger S. Loomis, *Arthurian Tradition and Chrétien de Troyes, op. cit.*, p.219.

と読みとれるのである。

とすると王妃を奪って近隣の王と事を構えたメルヴァスもただの現実の暴虐な王ですまされるはずがない。事実 Melvas のウェールズ語形は Melwas であり，その意味は「青春の王」であるとされる[41]。いかにも夏の国の王にふさわしい名である。さらに Melwas はマエロアス（Maheloas）の形で他の中世フランス文学にあらわれる。クレチアン・ド・トロワの『荷車の騎士』以前の作品である『エレックとエニッド』では，題名ともなっているふたりの結婚式にマエロアスも参集する。

「高位の貴族，ガラスの島の領主マエロアスも来た。この島で雷鳴を聴くことはなく，雷が落ちることも嵐が吹くこともない。ヒキガエルも蛇も棲まず，暑すぎることはなく，冬になることもない。」[42]

かれはメルヴァスと同様に「ガラスの島」（l'île de Voirre）の領主である。メルヴァスが「夏の国」を領地とするように，マエロアスの島は雷鳴も嵐もなく，冬もない常夏の国である。要するにかれははるか海上にある楽園ともいうべき他界から来た王なのである。地上に下りたメルヴァスは卑小な王になり果てているが，もとはといえば神ともされる人物の零落した姿なのである。

さらにマエロアスはメレアガン（Meleagant）と同一人物であることは広く認められている[43]。とするとクレチアン・ド・トロワは知ってか知らずか，マエロアスをメレアガンとして『荷車の騎士』に再登場させていることになる[44]。メレアガンには他界の王の面影はほとんど失われ，邪悪な人物となってしまった。それでもかれは越えがたい流れの向こうに住む，誰もそこから帰らぬ国の王の息子である。かれの住む王国の名は Gorre，一写本では Goirre であるが，これとても Voirre のくずれた形であるかもしれない[45]。あるいは Gorre はウェールズ語のガラスを意味する語 gutr から派生したともされる[46]。

中世文学の例にもれず，『荷車の騎士』に語られた王妃の誘拐の物語にも，その先例・類話が『ギルダス伝』以外にも存在する。もちろん細部にわたって一致をみるわけではな

---

(39) ウェールズ語では「ガラスの島」（Ynisgutrin），アングル語では「ガラスの町」（Glatigberi）となっているが，島も町もここでは区別なく用いられているのであろう。現実のグラストンベリーは沼地に囲まれた小高い丘の上にあり，あたかも島のような景観を呈しているという（Gaston Paris, art. cité, *Romania*, X, p.491）。『ギルダス伝』本文で，この場所は「葦と川と沼地によって守られたとりで」（munitiones arundineti et fluminis ac paludis causa tutelae）としているのも無意味な記述ではないのかもしれない。ケルト人の他界は海上の島から川の向こうの城へと移る場合がある。グラストンベリーはその後ケルトの他界の島の名であるアヴァロン（Avalon）とも同一視され，十二世紀末にはアーサー王の墓まで「発見」された。

(40) 他界の特徴，景観については次を参照。Howard Rollin Patch, *The Other World according to Descriptions in Medieval Literature*, Harvard University Press, 1950.

(41) Roger S. Loomis, *Celtic Myth and Arthurian Romance*, New York, Columbia University Press, 1927, p.11, note 27.

(42) Chrétien de Troyes, *Erec et Enide, op. cit.*, vv.1942-1947.

(43) Roger S. Loomis, *Arthurian Tradition and Chrétien de Troyes, op. cit.*, pp.218-219.

(44) Gaston Paris, art. cité, *Romania* XII, p.511. ガストン・パリスによれば，クレチアン・ド・トロワは異なる源泉から名をえていて，マエロアスとメレアガンが同一人物であることに気がつかなかったようだ。

(45) Roger S. Loomis, *Arthurian Tradition and Chrétien de Troyes, op. cit.*, pp.219-220.

(46) Ferdinand Lot, 〈Celtica〉, dans *Romania*, XXIV, 1895, p.332.

く，クレチアン・ド・トロワの創造した部分が大きいことはいうまでもない。

その徴証の一つが思いがけない所に存在する。北イタリアのモデナの大聖堂，北側玄関の飾り迫り縁に彫られた浅浮き彫りの画面である[47]。好都合なことに人物像には名前が付されている。濠に囲まれた城の中には Winlogee という女性がいて，城の左手からは Isdernus，Artus de Bretania，右手からは Galvaginus を先頭にして Galvarium，Che と刻された騎士が城に押し寄せている。城門で防戦しているのは Burmaltus，Mardoc，Carrado である。他の類話との比較からしても，これは誘拐された Winlogee を Artus 以下の騎士が奪い返そうとする場面を浅浮き彫りにしたものと理解するのがもっとも自然である[48]。ただし救出の主役がアーサー王なのかゴーヴァンなのかイスデルヌスなのかは，画面からだけでは判然としない。王妃を救出する者については，ランスロに定着するまでには異なる伝承があり，時にはアーサー王とされ時にはゴーヴァンと推定されるからである[49]。誘拐の首謀者は類話から推定すると Mardoc らしい[50]。

いずれにしてもこの場にランスロの姿はない。ということは浅浮き彫りに描かれた場面は，クレチアン・ド・トロワの『荷車の騎士』とは異なる伝承あるいはそれ以前の形を表わしているのであろう。事実この彫刻はクレチアン・ド・トロワの作品よりも数十年早く十二世紀の初頭，遅くとも1140年には完成したものと考えられている[51]。時はまさに第一回十字軍の時代で，聖地に向かうブルターニュ公やノルマンディ公が行軍の途次に滞在した町々で，付き従う吟遊詩人たちが語り広めた話が回り回って大聖堂の飾り迫り縁に固定したとすることも根拠のない推定ではないのである。

肝心の幽閉された王妃の名は Winlogee である。アーサー王の妻の名には二つの系統があったらしく，古ブルトン語では彼女は Winlowen（白く喜ばしいの意）とされた[52]。時代はだいぶ下るが，ラテン語で記されたアーサー王物語の一つである『ゴーヴァンの誕生』[53] では，王妃の名は Winlowen 系統の Gwendoloena としてあらわれる。また上に述べた大聖堂の彫刻にあった Isdernus と同一と考えられる人物を主人公とした『イデール』(Yder)[54] では，イデールは最後にかれと結婚することになる Guenloie を恋人とするが，同時にかれは王妃グニエーヴルとの仲をアーサー王にしばしば嫉妬される人物でもある。『イデール』の作者がかれの恋人を Guenloie とする話と Guenievre とする話を折衷した結果起きた混乱なのであろう[55]。Guenievre は中世ウェールズ語で書かれた『マビノギオ

---

(47) 見やすい図版として次のものがある。*Arthurian Literature in the Middle Ages*, ed. by Roger S. Loomis, Oxford, Clarendon Press, 1959, plate 2 facing p.60.

(48) 画面からの物語の再構成については次を参照。Roger S. Loomis, *Celtic Myth and Arthurian Romance, op. cit.*, pp.9-10.

(49) Jessie L. Weston, *The Legend of Sir Gawain*, London, David Nutt, 1897, pp.67-84.

(50) Roger S. Loomis, *Celtic Myth and Arthurian Romance, op. cit.*, pp.10, 16.

(51) 年代については次を参照。*Grundriss der Romanischen Literaturen des Mittelalters*, vol. IV, *Le Roman jusqu'à la fin du XIIIe siècle*, tome 1, Heidelberg, Carl Winter, 1978, p.187.

(52) Roger S. Loomis, *Celtic Myth and Arthurian Romance, op. cit.*, p.7.

(53) *De ortu Waluuani nepotis Arturi*, dans *Latin Arthurian Literature*, ed. and translated by Mildred Leake Day, Cambridge, D.S. Brewer, 2005.

(54) *The Romance of Yder*, ed. and translated by Alison Adams, Cambridge, D.S. Brewer, 1983.

(55) Roger S. Loomis, *Celtic Myth and Arthurian Romance, op. cit.*, p.8.

ン』中にあらわれるアーサー王の妻 Gwenhwyvar（グェンフィヴァル，白い幻，白い妖精の意）[56] に由来する名前で，その後のアーサー王物語群ではこちらが大勢を占めた。要するに Winlogee は Winlowen と Guenloie の間の過渡的な形と考えられる[57]。これをもってしてもモデナの大聖堂の彫刻にあらわされた話がブルトン人によってもたらされたと推定できる。

6 『ランツェレット』

次に取り上げるのは中世ドイツ語版の『ランツェレット』である[58]。もし作者ウルリッヒ・フォン・ツァツィクホーフェンの作中での言明を信ずるならば，『ランツェレット』の直接の源泉はあきらかである。物語の終わり近くで作者は次のように作の由来を記している[59]。

作者はまずフランス語本（ein welschez buoch，v.9324）が述べる所に何ら加除することなくドイツ語にしたという。その本を知るそもそものきっかけはイギリス王がオーストリア公レオポルトの捕虜となり，公が莫大な身代金を王に課した時のことである。捕虜となった王はレオポルト公に人質として異国の遠い国から来た高位の諸侯を差し出した。皇帝ハインリッヒはドイツのいくつかの地方にかれらを適宜配置した。人質のひとりにユーグ・ド・モルヴィル（原文では Hûc von Morville，v.9338）と呼ばれる者があり，かれが『ランツェレット』のフランス語本を所有し，それを作者に提供したのである。親しい友人たちの切なる頼みにより，ウルリッヒ・フォン・ツァツィクホーフェンが異国から渡ったこの長い物語をできるかぎりドイツ語に写すという重責を荷なったのである。

イギリス王リチャード一世（獅子心王）が十字軍の遠征からの帰途，1192年に聖地での戦功争いでかねてうらみを買ったオーストリア公に捕えられ，ついでドイツ皇帝ハインリッヒ六世の監視の元に置かれたのは歴史上の事実である。1194年リチャードは莫大な身代金を支払い解放されるが，同時に残金の担保として王の親族，高位の貴族，聖職者が人質として皇帝に引き渡されたことも各種の年代記に記すところである[60]。作者の言明はほぼこれらの記録に適合しているといってよい。ところが残念なことにドイツ皇帝に送られた人質として史料の中にユーグ・ド・モルヴィルの名は見当たらない。しかし該当者として補せられる者の中には，カンタベリー寺院で大司教トマス・ベケット（Thomas Becket）を殺害した騎士の内のひとりユーグ・ド・モルヴィルもいる[61]。

作者として名のっているウルリッヒ・フォン・ツァツィクホーフェンについてもさまざ

---

(56) Joseph Loth, *Les Mabinogion*, Paris, 1913, (Genève, Slatkine Reprints, 1975), I, pp.259-260, note 3.

(57) Roger S. Loomis, 〈The Oral Diffusion of the Arthurian Legend〉, dans *Arthurian Literature in the Middle Ages, op. cit.*, p.61.

(58) 以下で用いたテキストは次のものである。Ulrich von Zatzikhoven, *Lanzelet*, texte présenté, traduit et annoté par René Pérennec, Grenoble, ELLUG, 2004. なお次のフランス語訳も参照した。Ulrich von Zatzikhoven, *Lanzelet*, traduit par Danielle Buschinger, Paris, Champion, 2003.

(59) *Lanzelet*, vv.9322-9349.

(60) Martin Aurell, *op. cit.*, pp.241-242.

まな詮索がなされた。一時は1214年のザンクト・ガレン修道院の文書にある capellanus Uolricus de Cecinchovin plebanus Loumeissae の記事を手がかりに，時代と名前の適合性から，現在のスイスの Zezikon の人とする説が有力であった。これにもスイスの片田舎の司祭（plebanus）がどうして有力貴族と知り合うことができたかなどの難点がある。近年ではドイツ西南部の一集落である現在の Zizingen の出身であるとの説も出されている[62]。

作品中に加除せず写したとする「フランス語本」おそらくはアングロ・ノルマン語本についても，原本は失われたものの作者がはっきりと述べており史的状況にも合うところから，その存在は長く疑われることはなかった[63]。中世のドイツではアーサー王物語といえば，原典が失われた場合を含めてフランス語の作品からの翻訳物と決っていたのである。近年にいたって作品中の描写，語形に示されたフランス語的特徴などの精緻な分析によって，その根拠はより強められたといってもよい[64]。

作者や原典については諸家の説はかならずしも一致しないが，作品の内容の評価に関しては，原典にもともと由来するにせよ作者の創作によるにせよほぼ一致している。

『ランツェレット』は主人公の出生と一歳の時の水の妖精（merfeine，v.180）による誘拐にはじまり，数々の冒険を経て最後の幸福な死にいたるまでの一代記の体裁をとっている。その点で主人公の特定の比較的短い時期にあった出来事を語るクレチアン・ド・トロワの『荷車の騎士』とは大きくことなる。

当時通用していた数々のエピソード，妖精に育てられる少年，女性の貞節を試すマントの試練，父親を倒しその娘と結婚する話，大蛇の口に接吻するという恐怖の口づけ（fier baiser），三日間の槍試合などが次々と展開する。のちに見る王妃の誘拐譚もその一つにすぎない。相互の事件の間にはかならずしも緊密な結びつきがあるわけではなく，ある冒険が主人公なり物語の転機となることもない。主人公ランツェレットは二度結婚するが，物語の進行につれて妻は次々と忘れられて行ってしまう。三度目の結婚は女主人公のイブリスとの結婚であるが，その後も別の女性の愛人となる始末である。結局この物語は作者が誰であれいくつかの短編を寄せ集めたもの，さまざまなモチーフ，場面，挿話の集成，パッチワークのようなものと評されることになる[65]。一般にもつランスロ像とはいちじるしくかけ離れやや御都合主義的なところがあるが，その分ランスロの別の一面を垣間見させる作品ともいえるのである。

---

(61) René Pérennec, *op. cit.*, pp.34–39. ただしユーグ・ド・モルヴィルは中世文学にままあるように自己の作品の真正さを権威づけるために仮託された人物であり，作者が「発明」した保証人であるとの説もある（Danielle Buschinger, *op. cit.*, p.14）。

(62) René Pérennec, *op. cit.*, pp.32–34.

(63) Gaston Paris, art. cité, *Romania*, X, p.471; Jessie L. Weston, *The Legend of Sir Lancelot du Lac, op. cit.*, p.11; James D. Bruce, *op. cit.*, p.207.

(64) René Pérennec, *op. cit.*, pp.19–21. ただしこれにも『ランツェレット』は，当時のフランス語とドイツ語の文芸に通じた作者がそこここからモチーフと登場人物を借りて自分の創意で組み立てた作品であるとの説もある（Danielle Buschinger, *op. cit.*, p.14）。

(65) Gaston Paris, art. cité, *Romania*, X, pp.471–472; James D. Bruce, *op. cit.*, p.214; Danielle Buschinger, *op. cit.*, p.14.

そこで本論のテーマに沿って，『ランツェレット』における王妃誘拐譚がどうなっているかを見て行くことにする。ここでの誘拐，というよりも王妃を取りもどす試みは二回にわたってなされる。まず第一の話は次のような次第である[66]。

今やイブリスと結ばれ，ヴァルヴェインに会うためにランツェレットはかれを求めて旅をしている。途中でアーサー王の宮廷の小姓に出会い，かれの口から王妃が危機におち入っていることを聞く。かれの話によると「迷いの森」（Verworrenen tan，v.5062）の王ファレーリン（Valerin）がカーディガンのアーサー王の元に来て，何をいっても何を望んでも罰せられない許しを王に乞い，王はそれを認めたとのことである。ファレーリンが申し立てるには，ギノーフェレ（Ginovere）に関してかれはアーサー王よりも多くの権利を有している，ギノーフェレの物心つかぬ前から彼女はかれに約束されていたのだ。アーサー王もその臣下も何も知らぬことだと答える。一騎打ちに訴えてもファレーリンは自分の権利を守るという。もしかれが負ければ王妃を自由にするし，勝てば王妃を連れ去る。アーサー王は承知し，一週間後に決闘が行われることになる。

小姓の説明によれば，ファレーリンは恐ろしい城を持っているという。城の前の囲い地にはけがらわしいけものが一杯いて，誰も通り抜けることができない。斜面の下にはいつも霧がかかっており，蛇によって守られている。蛇たちにファレーリンが命令を下さないかぎり，誰も城に近づくことができない。城は太陽のように輝いていて泉が中にある。

ランツェレットとイブリスは小姓と別れて，夜を日に継いで進み，五日目にある公の城につく。公の夫人はランツェレットの遠縁の者で，足手まといにならぬようにイブリスをあずかり，ランツェレットに馬を二頭与え，案内の騎士をひとりつける。

ランツェレットは途中手間取ったものの，日の昇る前にカーディガンに到着する。ファレーリンは美々しく武装してすでに矢来の中に立っている。一方ヴァルヴェインは勇者にしか許されぬ名誉の石に座し，その脇にはギノーフェレが控えている。ランツェレットはヴァルヴェインに近づき，代わってギノーフェレのために戦う許しを乞うが，ヴァルヴェインは自分の名誉のためにも承知しない。しかしランツェレットが誰であるかを知ると（かれは実はアーサー王の妹の子であり，ヴァルヴェインのいとこに当たる），ヴァルヴェインも王もランツェレットが王妃のための決闘者となることを承諾する。

始めは馬上の槍試合で，ついで徒歩の剣での戦いと型通りの一騎打ちがふたりの間で続く。最後にランツェレットの力がまさり，足下に敵をおさえつける。ランツェレットはファレーリンに降参をすすめ，ファレーリンもそれに従う。今後は王妃を苦しめることはしないと誓い，アーサー王も寛大な心からかれを許す。しかし後々王はこのことを後悔することになろう。ファレーリンはのちに前言をひるがえすことになるのだから。イブリスは壮麗な出迎えの列によって宮廷にむかえられる。

ファレーリンはアーサー王の宮廷にやって来て，まず何をいっても何を望んでも罰せられない許しを願い出る。単身で宮廷に乗りこんだ自分の身柄の保証を求めたとも解せらるが，「強いられた約束」の弱められた名残り，変形とも受けとれる。

---

(66) *Lanzelet*, vv.4927-5396.

クレチアン・ド・トロワの『荷車の騎士』では，誘拐者のメレアガンはいつからのことかはわからないが，王妃を愛していたと父親に口走っていた。ここでは王妃は幼い時からファレーリンに約束されていたと明かされる。ギノーフェレのあずかり知らぬことであったとしても，おそらくこのことは事実であったのであろう。たしかにファレーリンは，アーサー王にとっては理不尽でも，王妃にたいして多くの権利を有していたのである。失われた妻を求めて他界からかつての夫が地上に降り立つのはケルトの伝承の一類型である。

ファレーリンは自分の権利を主張すべく決闘に訴える。衆人環視の中で正々堂々とした決闘でランツェレットは勝利し，ファレーリンも王とランツェレットの寛大な許しによりいさぎよく引き下がる。戦いはランツェレットの勇武を証するだけで終わった。王妃の危機を救ったのはランツェレットである。しかしこの場面でもその後もランツェレットと王妃の間には何ら特別な関係は存在しない。ランツェレットはアーサー王の甥とされ，二度の結婚を経て，今は三度目の妻を迎えている身であって，ランスロのような王妃への至純の愛はとうてい望むべくもない。

ファレーリンその人は思いがけない王妃への権利の主張をのぞけば，通常の騎士とさして変らない。ただかれの住む城は恐ろしく変った城である。城の周囲にはいつも霧がかかっており，けものや蛇によって守られていて誰も近づくことはできない。上に立つ城は太陽のように輝いており，泉もある。ボードマギュの城が越えられぬ河の向こうにあり，グラストンベリーが沼地に囲まれている代わりに，ファレーリンの城はけものや蛇によって守られている。水の名残りなのかかれの城はいつも霧がかかっている。人が容易に近づけない点では同じであり，また「ガラスの町」のようにファレーリンの城も太陽のように光り輝いている。かれの城もやはり他界にある城の様相をはっきり呈している。

前世の縁か何かで結ばれていれば当然であろうが，以前の約束にもかかわらずファレーリンはギノーフェレをあきらめない[(67)]。ファレーリンの二度目の誘拐は前回ほど礼節をわきまえたものではなかった[(68)]。

ランツェレット，ヴァルヴェインら五人が一つの冒険を終えて，アーサー王の滞在するカーディガンの城まであとわずかな旅程のところまで来ると，かねて知った小姓に出会った。かれから不幸な知らせを聞く。アーサー王と王妃と家中の者がうちそろって慣例の白鹿狩りに出たところ，ファレーリン王があらわれ，王妃を連れ去った。一同は悲嘆にくれているという。ランツェレットたちはすぐさま馬に乗り町にいそぐ。皆のいうには，王とすべての臣下はファレーリンの居城である「迷いの森」の前に陣取り，考え得るあらゆる手段で城を攻囲しているが，何の役にも立たない。一方ファレーリンは王妃に対して決して悪さはしない，彼女の意思に反して何もしないと約束する。アーサー王とギノーフェレの間に生れた息子ロウト（Lout）も三千の騎士を率いてかけつける。ランツェレットと

---

(67) 多くの誘拐譚では，誘拐はあらかじめ告知されたり，前触れがあることが多い。中世アイルランドの伝承にあるコンラは女によって他界に誘われるが，ドルイドの呪文によって撃退される。二度目の誘いによってコンラは女と共に他界におもむく。エーダインを求めるミディルは一度目の誘拐は失敗し，二度目に成功する。またオルフェオの妻ヒューロディスは他界の王に連れ去られる夢を見て，のちにそれは現実となる。『ランツェレット』もこのような話型にそっているのであろうか。

(68) *Lanzelet*, vv.6673-7444.

四人の騎士は攻囲の陣にいるアーサー王と仲間に会い，共に涙を流して悲しむ。

難攻不落の城を攻略するにはどうしたらよいのか，ランツェレットの発議により臣下たちは集まって相談，協議する。トリスタント（Tristant）の提案で「霧の湖」（Genibeletensê，v.6991）の魔術師マルドゥク（Malduc）を呼び寄せることにする。あらゆる王国中でかれほど魔法に長けた者はいないのだ。このマルドゥクとはエーレクがその父を殺し，ヴァルヴェインが兄弟を殺し，アーサー王が国から追放し，皆がさんざんに苦しめた人物であった。このような事情から，これまでの誤ちの埋め合わせを約束してアーサー王自身がマルドゥクの元におもむき，助力を頼むことにする。王と共にカルイェト，トリスタント，ランツェレットが同行する。

一行はカーディガンの近くの森に入り，四日目に「叫ぶ沼地」（schrîenden mose，v.7041）に到着する。この沼地は時を定めて叫び声を上げ，どんな馬も沼地を越えることはできない。一行は叫ぶ沼地を速歩で渡るひとりの騎士を認める。かれの馬は足跡を見い出せないほど速く走るのである。かれはかねて知った騎士でドディネス（Dodines）という者である。アーサー王以下の四人はドディネスの歓待を受けたのち，かれの案内で「霧の湖」の岸辺にいたる。マルドゥクの城は橋によって連絡しているものの，この橋はマルドゥクが命じないかぎり誰にも見えない。一行はなすすべもなく城に通じる道の前でむなしく立ちつくすだけである。

翌朝アーサー王の願いに応えるかのように，この館の主人の娘が橋を渡って来る。王は娘に一部始終を打ち明けマルドゥクとの仲介を頼むと，娘は使者の役を引き受ける。娘は父の元におもむき，今まで仕えてきたことに免じて自分の頼みを聞き入れてほしいという。父親は承知して，娘に願いをいわせる。娘はアーサー王一行の通行権を願い出る。王がこれまでの誤ちのつぐないをするので，助けを与えてほしいと願っていると語る。マルドゥクは王妃を解放したあかつきには，エーレクとヴァルヴェインの身柄を自分に引き渡すことを条件に助力を引き受ける。娘はアーサー王の元に引き返し，父の要求を伝える。同意しがたい要求であったが，ランツェレットとトリスタントの説得により王はこの条件をのむ。王の一行はマルドゥクを連れて攻囲の陣に帰り，事情を皆に伝える。勇気と名誉を重んずるエーレクとヴァルヴェインは，王国と王妃のためなら喜んで人質になることを申し出る。

翌週マルドゥクは魔術の書の中に秘術を探し，「迷いの森」の城の周囲を守る蛇を追いやり，城の内外の命あるすべてのものを眠らせる。王の一隊は城中になだれこみ，ファレーリンと城にいるすべての者を皆殺しにする。その間にも王は王妃のいる部屋に入ると，王妃は外の騒ぎもまったく知らずに三十人の乙女たちと共に深い眠りについていた。マルドゥクが声をかけると魔法が解ける。王妃がマルドゥクに怒りを収めるよう願ったにもかかわらず，マルドゥクはエーレクとヴァルヴェインを連れて立ち去る。いずれエーレクとヴァルヴェインは救出されるのであるが，それはまた別の物語である。

二度目の誘拐は白鹿狩りの最中に起きたとランツェレットたちが出会った小姓の口から語られた[(69)]。かれはしかとは知らぬらしいが，王は負傷し供の騎士は殺されたようであるから，当然ファレーリンは暴力に訴えて王妃を奪ったのであろう。小姓はさらにこと細かに事件がどのようにして起きたか，ファレーリンが王妃を連れてどこに行ったかをラン

ツェレットらに話したのだが，残念ながら読者には詳細は知らされない。しかし誘拐の時期はほぼ見当がつく。ランツェレットら五人は小姓に会う前に，野原は一面緑となり，鳥たちは森で歌い，人々の心が喜びで満たされた時節にカーディガンに向かっているから，この事件もその頃に起こったのであろう[70]。王妃の連れ去られた先はその後の物語の進行からはっきりしていて，前にもあった「迷いの森」のファレーリンの居城である。

王妃の救出はあっけないほど簡単である。城の争奪をめぐる攻防も，決闘もない。救出者はここではアーサー王でもランツェレットでもない。かれらは城の前でただ手をこまねいているだけである。魔術師のマルドゥクが魔法の書の中に秘術を探し，守護する蛇を追いやり，すべての人を眠らせて事は決する。あとはアーサー王の一隊が城中になだれこみ，いとも容易に皆殺しにするだけである。王妃は昔話にある眠り姫のように何事もなかったかのように部屋の中で眠っていた。

王妃を救出する魔術師のマルドゥクとは誰なのであろうか。名前だけを取り出せば，かれは「賢者マルドゥク」（Malduc der wîseman，v.7364）とされていて，クレチアン・ド・トロワの『エレックとエニッド』に出てくる Mauduiz li Sage[71]と同一人物であるようだ[72]。クレチアン・ド・トロワの作品ではかれは円卓の騎士のひとりとして名を挙げられているだけであるが，ウルリッヒは何らかの理由でアーサー王と対立し国から追放された者としている。かれは賢者の異名を元々保持し，さらにここでは魔術師として登場しているのである。魔法は人知の及ばぬ不可解な不思議ではなく，広く深く学ぶべき知識，魔法の書の中に秘法を探す時代に変わりつつあった。

ただし物語の中の役割を考えると，マルドゥクは中世アイルランドの伝承にあるドルイドと似通うところがある。たとえばエーダインは他界に連れ去られるが，ドルイドは呪法によって彼女の誘拐された先である妖精の丘の場所をつきとめている[73]。

『ランツェレット』の作者は王妃の救出劇そのものよりも，救出にいたる過程，登場人物とかれにまつわる出来事や不思議にむしろ関心を寄せているようだ。

---

(69) 誘拐の舞台が白鹿狩りの最中とされるのは，直接であるかどうかはともかくクレチアン・ド・トロワの『エレックとエニッド』から借りたものである。皆が集まる宮廷で，アーサー王は白鹿狩りの慣習を再興すると宣言する。白鹿を得た者は宮廷中のもっとも美しい乙女に口づけをする権利を得る。これにともなう悶着を憂慮してゴーヴァンは反対するが，王に二言はない。翌朝狩りが始まり，王妃も侍女とエレックを伴として参加する。三人は皆におくれ，森の中でひとりの武装した騎士イデール（Yder）と連れの乙女と小人に会う。侍女とエレックは小人に鞭打たれ，恥辱を受ける（Chrétien de Troyes, *Erec et Enide, op. cit.*, vv.27-274）。白鹿狩りの最中に鞭打たれた恥辱を王妃の誘拐に置き代えれば，そのまま『ランツェレット』の誘拐譚となる。またイデールは別の物語では王妃のかつての愛人とされるが，ここでは警護の役を主人公エレックにゆずり，みずからは敵役に回った。イデールはモデナの大聖堂の彫刻にあった，Ysdernus である（Roger S. Loomis, *Arthurian Tradition and Chrétien de Troyes, op. cit.*, pp.77-79）。
いずれにしても広く流布していたであろうこの話をウルリッヒは事改めて再話する必要を認めず，ただ白鹿狩りの最中に王妃が連れ去られたと語るだけにとどめたのであろう。

(70) クレチアン・ド・トロワの『エレックとエニッド』では，新しい季節の聖霊降臨祭の日に，カラディガンの城にアーサー王は宮廷を開いた」（vv.27-29）とあり，「こうして狩りは翌日の日の出に定められた」（vv.67-68）とあって，作者は狩りの日取りを具体的に記している。

(71) *Erec et Enide*, v.1679.

(72) Jessie L. Weston, *The Legend of Sir Lancelot du Lac, op. cit.*, p.80; Roger S. Loomis, *Arthurian Tradition and Chrétien de Troyes, op. cit.*, p.487.

(73) 前掲拙論，93ページ。

アーサー王やガルヴェインなどの読者にすでになじみと思われる人物は新味を欠くものと考えたのか，作者はすくなくともこの場面ではあまり活躍させていない。『荷車の騎士』では終始一貫して物語の主人公であったランスロも，ここでは母の危難にはやり立つロウトをなだめ，二人の人質をマルドゥクに差し出すことに立腹するアーサー王を説得する助言者の役割しか果していない。むしろ作者は他の物語ではあまり活躍しない人物，自分の創作した人物を登場させてみずからの手柄にしたいような気配がある。

7　トマス・マロリーの作品における王妃の誘拐

次いで見て行くのはトマス・マロリーの作品である。かれは中世末期のイギリスで中世フランス語で書かれた『散文ランスロ』を主な種本として中世英語でアーサー王物語を集大成した。ここでもかれの長大な作品のうちから王妃の誘拐の部分だけを問題とする(74)。

陽気な五月がやってきた。その五月のある日，王妃グィネヴィアは騎士を呼んで，翌朝ウェストミンスターの近くの野と森に五月の花つみに行くと告げた。供をするのは十人の貴婦人と円卓の騎士の中でもとくに「王妃の騎士」とされるケイをはじめとする十人の騎士とその従者たちである。ただしかれらは皆美しい馬に乗り，緑色の服を着用しなくてはならない。

さてそのころバグデマグス王の息子メリアガーントと呼ばれる騎士がいた。かれは円卓の騎士の一員であり，ウェストミンスターから七マイルほどの所にアーサー王に与えられた城を所有する身でもある。かれは何年も前から王妃を熱愛しており，なんとか待伏せをして王妃を誘拐しようとしている。しかしラーンスロットへの恐れから，かれが王妃の供をしているかぎりは王妃には近づけなかった。メリアガーントは常日頃王妃の動静を探っていて，王妃のこの日の遠出を知り，またラーンスロットが一行に加わっていないことも知った。好機到来とかれは二十人の武装した騎士と百人の射手を引き連れて誘拐を企てた。

王妃と騎士は五月の花をつみ，草や苔や花で美しく身を飾りたてている。そこに森から武装した部下と共にメリアガーントがあらわれ，一行の前に立ちはだかる。王妃らは騎士にあるまじきメリアガーントの卑怯な振舞いを口をそろえてなじるが，かれは聞く耳をもたず戦いがはじまる。王妃の騎士たちは十分な武装もないままよく四十人の敵を倒すものの，多勢に無勢で六人はひどいけがをして馬から落ち，残る四人も手傷を負う。このままでは全員命を落とすのは必至とみて，王妃はメリアガーントに呼びかける。かれらの命を助け，かれらが自分のそばを離れないという条件で，メリアガーントに従うと約束する。

---

(74) 用いたテキストは次のものである。*The Works of Sir Thomas Molory*, ed. by Eugène Vinaver, Oxford, Clarendon Press, 1967, vol.III, pp.1119-1130（Bk. XVIII・25-Bk. XIX・5）．訳本として次のものを参照した。トマス・マロリー『アーサー王の死』厨川文夫・厨川圭子訳，ちくま文庫，1986年。トマス・マロリー『アーサー王物語　V』井村君江訳，筑摩書房，2007年。Thomas Malory, *Le Roman du Roi Arthur et de ses Chevaliers de la Table Ronde*, tome II, traduit par Pierre Goubert, Nantes, L'Atalante, 1994.
マロリーとほぼ同時代の印刷業者ウィリアム・キャクストン（William Caxton）は1485年にマロリーの作品を『アーサー王の死』（*Le Morte Darthur*）と題して上梓している。しかしこの標題は内容を十分に表わしていないし，同名の中世フランス語の作品とも紛らわしいので，マロリーの作品の題名としてはここでは用いない。

王妃は戦いを停止させ，皆を連れてメリアガーントの城に向かう。

王妃はひそかに小姓を側に呼び寄せ，機を見て逃れラーンスロットに危急を知らせるように命ずる。頃を見計らって小姓は馬に拍車を当て全速力で駆ける。これを見てメリアガーントは王妃の命でラーンスロットのもとにかけつける使いと察し，矢を射かけるが小姓は逃げおおせる。メリアガーントはラーンスロットへの恐れから三十人の射手を途中で待伏せさせる。ただしラーンスロットは容易に倒せる人間ではないから馬をねらうように命ずる。

小姓はウェストミンスターに着くとただちにラーンスロットに事の次第を注進する。ラーンスロットは時をおかず武装し，馬の仕度をさせる。ラーンスロットは全速力で駆け，テムズ川を馬でランベスに渡り，一行のあとを追って森に入る。そこには三十人の射手が待ちかまえ，かれに引き返すように，さもなくば馬を射殺すという。ラーンスロットはかれらの卑劣さをなじる。かまわず射手は馬に矢を放つと，四十本の矢を受けて馬は倒れる。ラーンスロットはやむなく徒歩で進むが，溝や垣があってかれらに近づけない。しばらく歩くうちに，鎧かぶと，盾と槍の重みに耐えかねるようになる。そこに折よくたきぎを拾いに来た一台の荷車が通りかかる。荷車に乗せるようラーンスロットは頼むが，御者はことわる。御者のひとりを打ち倒し，もうひとりの御者をおどして荷車に飛び乗り，メリアガーントの城に向かう。

グィネヴィア王妃と侍女たちが城の窓から外を見ていると，荷車の上に立つ騎士が目に入る。騎士はしばり首にされるのだろうとひとりの侍女がいう。王妃は盾を見てそれがラーンスロットであることがすぐわかり，不吉なことをいった侍女をたしなめた。ラーンスロットは城門につくと大音声でメリアガーントに呼ばわり，門番をなぐり殺して門を開けた。

メリアガーントはたちまち恐れをなし，王妃の慈悲にすがってラーンスロットとのとりなしを哀願する。怒りに燃えるラーンスロットも王妃になだめられ矛をおさめる。「フランスの本」（the Freynsh booke）によれば，その後ラーンスロットは長く「荷車の騎士」（le Shyvalere de Charyotte）と呼ばれることになると作者は語る。

こののち王妃とラーンスロットの密会の場面が続き，王妃の不実が告発される。ラーンスロットはメリアガーントの裏切りに会い，一時は城に幽閉されるものの，最後はアーサー王の宮廷でメリアガーントを倒すことが語られる。

見てきたとおり，ここでもメリアガーントによる王妃の略奪という事件は語られている。しかしその様相はクレチアン・ド・トロワの『荷車の騎士』とはだいぶことなる。全体にわたって物語を世俗的，現実的なものにしようと作者マロリーは努力している。

メリアガーントは他界の印象を色濃く残した国，「誰も帰らぬ国」の騎士としては描かれていない。かれはまず円卓の騎士のひとりであり，突然アーサー王の宮廷にあらわれた未知の人間ではない。王妃を連れ去ろうとするメリアガーントに，王妃の供をする十人の騎士は口をそろえ「メリアガーント卿よ」（Sir Mellyagaunte）と呼びかけて，かれが円卓の騎士であることに一応の敬意を表している。かれの城は当時アーサー王の宮廷が置かれたウェストミンスターからわずか七マイルしか離れておらず，しかもその城はアーサー王から与えられたものである。数々の障害を越え，最後には剣の橋を渡らなくては入れない城の姿とはほど遠い。

作者はまた現実味を加えるためか，王妃に従う貴婦人と騎士をそれぞれ十人と定め，王妃をおそうメリアガーントの手勢を百六十人と正確さをよそおって記している。なんとか誘拐を現実に起った事件として読者に印象づけようとしている。

マロリーの描くメリアガーントは何年も前から王妃を熱愛しながらも，ラーンスロットの前では何の手出しもできない臆病者である。無法で向こう見ずではあるが勇猛さだけではランスロに劣らない，父の制止も聞かずたえずランスロに一騎打ちを挑もうとするメレアガンとは大きく人物像がへだたっている。したがってマロリーの作品では，王妃を保護しランスロとメレアガンの間を仲介しようとするボードマギュをこの場面に登場させることはないのである。

なるほどマロリーの作品にも荷車は登場する。「荷車の騎士ランスロ」の名声は物語世界では行き渡っていたので省くわけにはいかなかったのであろう。しかし荷車をめぐっての経過はクレチアン・ド・トロワとはことなる。『荷車の騎士』ではランスロは一度はメレアガンに追いつき一戦に及ぶ。乗馬を倒されやむをえず徒歩で進む。荷車の御者となっている小人に王妃がこの道を行ったかどうかをたずねると，荷車に乗れば王妃がどうなったかがわかると小人は答える。一瞬のためらいの後に王妃への愛がまさって，ランスロは荷車に飛び乗る。ランスロを乗せた荷車がとある城市に入ると，町の人々はかれの姿を見て驚き，口々に非難してののしる。それというのも作者の注釈によると，当時荷車は罪を犯した者，不名誉な行いをした者を乗せて町中を引き廻すさらし台の代用であったからだ[75]。ランスロが荷車に乗るのはあくまでも小人の言を信じて一刻も早く王妃の行くえを知るためである。これに反しマロリーでは，王妃の行く先を知っているかのような謎の小人は登場せず，荷車を御するのはたきぎを取りに来たありふれたメリアガーントの下人である。すでに小姓からくわしい事情を聞き，城に二マイルほどのところに達しているラーンスロットには，王妃の連れ去られた場所を人に聞く必要などはないのだ。

したがってマロリーの作品でラーンスロットが「運よく，たまたま」(by fortune)[76]通りかかった荷車に乗るのは，王妃の居所を知りたいがためにやむをえずした行為ではない。かれはただ重い鎧かぶとや盾などを身につけて歩くことに困りはて，さりとてメリアガーントの攻撃にそなえて武装を解くわけにもゆかない状況に置かれたのにすぎなかった。だからかれは荷車に乗るのに一時たりともためらいを見せず，かえって御者のひとりを打ち倒してみずから進んでそうするのである。かれにとって荷車は敵の城に乗りこむための目の前に通りかかった便利な乗り物にすぎない[77]。のちに傷つき捕われた十人の王妃の騎士に会った時にも，ラーンスロットは荷車に乗った次第を自分から報告してなんら恥ずる風は見せない。ただ城の窓から眺める王妃のお付きの婦人が荷車の中に立つ騎士を見て，「かれはしばり首になるのでしょう」[78] といって，高貴の騎士に対してひどい言い草だとただちに王妃にたしなめられている。この婦人のせりふにクレチアン・ド・トロワ以来の荷車の含意がわずかに引きつがれているようだ。

王妃の誘拐を語るにあたってマロリーとクレチアン・ド・トロワとの間には小さくない

---

(75) Chrétien de Troyes, *Le Chevalier de la Charrette*, vv.321-344.

(76) Thomas Malory, *op. cit.*, p.1126, 12.

(77) *Ibid.*, p.1608, note au page 1126, 14-16.

(78) *Ibid.*, p.1127, 5-6.

へだたりができた。さらにひとつ目につくのは，『荷車の騎士』とはことなる誘拐の場面そのものである。

五月の花つみ（Mayinge）[79] に出かけるにあたって，つき従う者たちはみな緑の服を着用することを王妃に命じられる。一行は陽気に森や牧場で五月の花をつみ，草や苔や花で美しく身を飾る。まさにこの時にメリアガーントは武装した部下たちと共に森からあらわれ，戦いののちに一行を城に連れ去るのである。

五月の花つみ自体は古くから今にいたるまでの習俗である。花ばかりでなく「これが肝要なのだが緑の葉を付けた木々や枝を求めて人々は森に行く。所によってはそれらは森の精霊（un Esprit silvestre）の衣装となる」[80]。その様子は十三世紀初めのジャン・ルナールの物語にも描かれている。マインツでは五月一日の前夜，「真夜中にすべての町民は町を出て森に行った。この町はいつも陽気であるという評判である。朝となり日が高くなると，かれらは花とグラジオラスと葉の付いたままの緑の小枝に飾られた五月の木（lor mai）を持ち帰った。グラジオラスと花と緑のこれほど美しい五月の木はかつて見られぬものであった。町の中をかれらは歓喜して木をしかるべく持ち運ぶ」[81]。この情景はドイツのマインツの話として描かれているが，おそらく当時のヨーロッパのいたる所に見られた光景なのであろう。

さらに五月の花つみのもっとも美しい図像的表現として十五世紀初めのランブール兄弟の描く『ベリー公のいとも豪華な時禱書』の一葉がある[82]。その五月の図では，貴族，貴婦人たちが馬に乗り野外で遊んでいる。一行は頭に緑の花飾りをのせ，首には緑の首飾りを掛けている。三人の貴婦人はさらに緑の馬具をつけた馬に乗り，自身も緑のマントを着ている。この図像と同じように緑一色に塗りつぶされた誘拐の場面を作者マロリーはどこから得てきたのであろうか。あるいはこれは作者の想像が生んだ世界であったのか。

その前にここで注意しなくてはならないことがある。メリアガーントがラーンスロットの到着に恐れをなして王妃に恭順の意を表し，ラーンスロットが十人の騎士と再会したところで，つまり王妃誘拐の一件が一応落着したところで，作者が次のように大書して記しているのである。すなわち「さて荷車の騎士の話はここで終りにして，話をもとにもどそう」[83] とマロリーは述べている。かれのいう「荷車の騎士」の話は，誘拐に続く後半部ではかれが大方依ったと思われる『散文ランスロ』（ひいてはその原典となったクレチアン・ド・トロワの『荷車の騎士』）とは異なる内容を含む今は失われた作品をもとにしたと作者は示唆しているかのようである[84]。そこではおそらく五月の花つみが王妃誘拐の背景として大きな役割を果していたにちがいない。

古来からウェールズの伝承のわずかな痕跡，十四世紀のウェールズの詩人の詩，十九世

---

(79) *Ibid.*, p.1120, 17.

(80) Arnold van Gennep, *Manuel de folklore français contemporain*, tome premier, 4, Paris, Picard, 1949, p.1422.

(81) Jean Renard, *Le Roman de la Rose ou de Guillaume de Dole*, éd. par Félix Lecoy, Paris, Champion (CFMA), 1970, vv.4151-4162.

(82) *Les Très Riches Heures du Duc de Berry*, Chantilly, Musée Condé/Paris, Draeger-Vilo, 1969.

(83) Thomas Malory, *op. cit.*, p.1130, 4-5.

(84) *Ibid.*, Commentary by Eugène Vinaver, p.1592; Gaston Paris, art. cité, *Romania*, XII, pp.501-502; Jessie L. Weston, *The Legend of Sir Lancelot du Lac, op. cit.*, p.49.

紀初めの注釈などに王妃の誘拐をたくらむメルウァス（Melwas）なる人物が記されている。Melwas がクレチアン・ド・トロワの Meleagant であることは前に述べた。

たとえば十四世紀のウェールズの詩人ダヴィド・アプ・グゥイレム（Dafidd ap Gwilym）の恋人の嘆きを歌う詩の一節の大略は次のようなものである。「メルウァスの策略を願ってもかいはない。盗人は幻術とぺてん（あるいは仮面，変装）で美女をこの世の果てに連れ出した。ぺてん師は緑の森に，木々の枝の城壁に行った」(85)。

さらに十八世紀にウィリアム・オーエン（William Owen）はメルウァスに関して次のような記事を書いている。「かれは緑の葉をまといグウェンフイヴァル（Gwenhwyvar）と供の者を待ち伏せた。王妃の一行はならわしに従って五月一日に夏の到来を迎えるために，カバの木の枝を集め花飾りを作りに行った。一方かれは同じ変装をして女を連れ去ったのだ」(86)。一見するとオーエンのこの記事はマロリーの物語から取ってきたように読める。それではなぜマロリーにはないメルウァスの緑の変装を記したのかの説明がつかないなどの難点がある(87)。ウェールズの伝承，マロリー，オーエンをつなぐ共通の伝統があるのではないかとも疑われる。

これらのウェールズの古い話からガストン・パリスはマロリーの作品の成り立ちを次のように推測している(88)。

古いウェールズの話によれば，メルウァスはアーサーの妻を森の中で誘拐した。しかもかれは木の葉の服で変装して誘拐したようだ。またマロリーが依った失われたフランス語の物語もそうしたものであった。王妃は供の者に緑の服を着用するように命ずる。帰りがけに一同は葉や草を身にまとい，誘拐者もまた草花で身を覆い供のひとりになりすまして王妃に近づき，彼女をまんまと奪ったのである。マロリーの作品かその元となった話では不注意か故意かメリアガーントの変装は除かれて，元の話にはない戦いによる誘拐に代えられている。王妃の寝台に残された血を見て王妃の不実をメリアガーントが告発するという次の話への展開のために戦いと負傷者が必要とされたのだろう。

さてそもそもマロリーの話はやや冗長な五月の讃歌から始まっている(89)。五月には草木が花開き実を結ぶように，若々しい心がみな花を咲かせる時期なのだ。マロリーの物語，オーエンの記事，あるいはクレチアン・ド・トロワの『荷車の騎士』にあっても，王妃の誘拐は五月に起きた。しかも前二者にあっては五月の花つみをし，木の葉を身にまとっている。

他の証言も加えてルーミスは王妃の誘拐譚を五月を境とする「夏」と「冬」の争い，最後に「夏」の勝利に終わる季節をめぐる神話に起源をもつものとしている(90)。五月一日はケルトの暦ではベルティネ（Beltaine）と呼ばれ，この日から夏がはじまる特別な日である。ウェールズでは近代にいたるまでこの日には若者が夏と冬の軍勢に分かれ模擬戦を

(85) Gaston Paris, art. cité, *Romania*, XII, p.503; Roger S. Loomis, *Arthurian Tradition and Chrétien de Troyes, op. cit.*, pp.215-216.

(86) Gaston Paris, art. cité, *Romania*, XII, p.504; Roger S. Loomis, *Arthurian Tradition and Chrétien de Troyes, op. cit.*, p.216.

(87) *Ibid.*, p.216.

(88) Gaston Paris, art. cité, *Romania*, XII, p.504.

(89) Thomas Malory, *op. cit.*, pp.1119-1120. この部分はキャクストン版では第18巻の巻末に置かれているが，内容的には王妃の誘拐を語る第19巻への導入となるものである。

行なう民俗行事が存在した。最後に夏が勝利をおさめ，人々は五月の女王を選ぶ。夏の軍の長は服も帽子も花やリボンで飾られるという。

類似した民俗行事はウェールズに限られたことではなく，ヨーロッパの各地に広がるもので例を挙げればきりがない[91]。いずれにせよ以上のいくつかの類話からルーミスは結論を導いている[92]。クレチアン・ド・トロワにおけるメレアガンによるグニエーヴルの誘拐はウェールズの季節神話にさかのぼる。そこでは夏の国の王メルウァスが五月の朝に冬の王に打ち勝ち世界の果てまで女を連れ去る[93]。

だとすれば季節の循環からしても物語の発展からしても，連れ去られた王妃を奪い返す話が接続してもなんら不思議はない。

---

(90) Roger S. Loomis, *Arthurian Tradition and Chrétien de Troyes, op. cit.*, pp.216-218. なおケルトでは，また中世フランスでも，一年は夏と冬の二季に分けられるようで，春と秋に言及することはまれである。五月は中世の観念では夏である。

(91) フィリップ・ヴァルテール『中世の祝祭』渡邉浩司・渡邉裕美子訳，原書房，2007年，163-169ページ。J.G. フレイザー『金枝篇（二）』永橋卓介訳，岩波文庫，1966年，322-324ページ。

(92) Roger S. Loomis, *Arthurian Tradition and Chrétien de Troyes, op. cit.*, p.218.

(93) カラドック・オブ・ランカルヴァンの『ギルダス伝』ではメルヴァスは aestiva regio を支配する王であったことを思い出してもよい。

〔抄　録〕

アーサー王の妻である王妃グニエーヴルが他界の王の面影を残すメレアガンによって誘拐される。クレチアン・ド・トロワの『荷車の騎士』はこの話を主題とした物語として後世にもっとも大きな影響をおよぼした。王妃に至純の愛をささげる湖の騎士ランスロは，王妃のあとを追ってさまざまな試練を乗りこえ，宿敵のメレアガンを倒して王妃の救出に成功する。しかしメレアガンとは誰なのか，王妃はなぜ誘拐されなくてはならなかったのか，救出者はランスロと定まっていたのか，どのようにして王妃は誘拐されたのかなどをめぐってこの話にはさまざまなヴァリエーションが存在する。

おそらくケルトの神話と種々の伝承にさかのぼる王妃の誘拐譚は，現存するいくつかの物語と徴証の中に残されている。徴証は先人の努力によって意外な所にも発見された。十二世紀の聖者伝にも王妃の誘拐が触れられ，モデナの大聖堂の浅浮き彫りにも刻まれている。もちろんクレチアンのあとをつぐ作者によっても踏襲された。とはいってもそれらの作品にもクレチアンの作品にはない新しい性格，特徴がある。本論においてはさまざまな証拠の中に奪われた王妃の物語の変異と起源をたどって諸説を紹介した。